
ベースノ干涉系

刀田 兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベースノ干渉系

【NNコード】

N8122T

【作者名】

刀田 穂

【あらすじ】

魔術。存在を嘘に紛い、認識を捻じ曲げる技巧。それは日常に潜み、闇に飛び交う 特異な高校生、山紙海斗やまかみが彼女と出合つたのは、クリスマスを間近に控える冬の夜だった 「魔術師は魔術を使えるから、魔術師なんかじゃない。魔術師は誰かに魔術を使うから、魔術師なのよ」 そして、彼の物語が加速する。（web拍手を導入しました）

居残り理由

ただ、楽しかった。

手を繋いで、一緒にご飯を食べて。

ゲームもやって。

ずっと一緒に居たって、そう思っていた。

このままずつとすべてが終わらなければって、そう願った。

一緒に終わらない争いを過ごしていったって、そう望んだんだ。

多分、私は君の事が

足がない死体が一人。
頭がない犬が五匹。
腕がない死体が二人。
胴体がない死体が一人
存在しない化物が一人。
殺人鬼が一体。
黒い男が一人。

「なんだそれ？あの殺人事件の話か？」

首を傾げたのは、明るい茶色い髪が印象的な高校生、山紙海斗だつた。

すると、その向かいの席に座る色素の薄いポニー・テールが特徴の女子高生、狭山奈津実。

彼女がこげ茶色の大きな瞳を開いて、海斗に言葉を返す。

「うん。今話題の獵奇的殺人犯の簡単な概要。連日、トップニュースにはならない事件だけね。不謹慎だけさ、殺人事件でもちよこつと、うちの街がＴＶに映ると嬉しいよね。しかも、市長が喜んでカラス激減の話なんて吹き飛んだよねえ」

「ああ、確かにな。つつか、犬まで死んでるのか。可哀想だな。もしかしたら、カラスも」

そう同情を口にして、海斗は奈津実の顔からふと教室の黒板に視線を移す。

黒板には歪んだメスシリンドラーなどの図と実験器具名。それと大雑把な実験の手順が書き殴られており、昨日の失恋が相当ショックだった事が伺える。確定的な証拠に、フラれた張本人である理科教師の真帆ちゃん（三十路）はダラッというより、シクシクとうつ伏せになり、職務放棄中だ。しかも、真帆ちゃんを慰めようと数人のクラスメイトが実験を放棄して話しかけている。クリスマスまでは新しい彼氏見つけなよ！！と励ましの言葉が聞こえてくる。

海斗と奈津実が居るのは、竜狩高校一階の理科実験室。別段、数人だけという訳でもなく、同じく一年五組の生徒全員が六時限目の授業を受けているのだ。簡単に言えば、理科の授業での実験中ということだ。やはり、最終時間、六時限目ということもあり学生の大半は、それぞれ同じ班になつた友人に話しかけている。暗黙の了解的に、真帆ちゃんが彼氏にふられた事には、慰め担当の生徒以外ノータッチである。

無論、海斗と奈津実がいる三班もペチャクチャと無駄な会話中だつた。

すると、同じ班の一人である、シンシンヘアの爽やかボーイ、栗木英士が、二人の会話に口を挟む。

「そういえば、俺。この間、インタビューされたよ。まあ、ＴＶには使われてなかつたけどさ」

「ホント!? 栗木君インタビューされたの…? これはレポーターとのフラグが立つたんじゃない!？」

軽いオタク用語を放ちながら、興味津々に目を輝かせる奈津実。しかし、彼女とは対照的に、海斗は呆れ顔をして、

「それは全くの嘘ですよ、狭山さん。殺人事件起こつてから、栗木と一緒に帰つてるけど、ＴＶの記者なんか見てないぞ。刑事なら見ただけどさ」

「おいおい。海斗くん。話盛れよ。親友としてはもう少し芸の腕を磨いてくれないと困る。俺みたいにね!!」

隣の席に座る栗木が、キラーンと効果音が付きそうな笑みを浮かべて、親指を立てる。黙つていればかつこいいと言われる理由がなんとなく分かる。

「盛るも何も嘘だろ。どうせ、お前のことだから、話の途中でボロ出すしさ」

「いいや。俺の会話術ならボロはださないよ。まあ、将来の夢は芸人だからね」

「それ初耳だわ。つい最近まで大学で考えるとかいつてなかつたか? まあ、俺も決まってないけどさ」

夢とは常に変わるものなのさ。はっはっはっ、と演技じみた口調の栗木。

そのやり取りを俯瞰するよつて眺めていた奈津実が何かを思ついたように口を開いた。

「山紙君と栗木君つて、小学校から一緒になんだつけ?」

「あ? 確か、最初に会つたのは空手の道場だよな? 栗木? それから中学で嬉しくもない再会して、今に至ると」

「そうか? 昔の事だからあんまり覚えてないし。でも、海斗が道

場をやめた理由は色濃く残つてゐるぜ。つつか、そこにガスバーナー繋いで」

ホイ、と栗木は奈津実に向かつてオレンジ色のガス管を渡す。奈津実も奈津実で、あいよとノリよくガス管を元栓に繋ぎ、開いた。

「それで、山紙君が道場やめた理由つてなんなの？ もしかして、

傷害事件？」

「違う、違う…… つて、あながち間違つてないか」

と、言つた海斗は、近くにあつたマッチを使い、ガスバーナーを点火。適当にガスや空気を調節して、

「対戦相手に怪我負わせたんだよ」

栗木が言葉を受け継ぐ。

「対戦相手に確か、左腕で正拳突きしたんだよ。そしたら、対戦相手が壁際まで吹き飛んで、重症。救急車とかが、いっぱい来て

」

空気が焼かれる音が耳をつく。少しの焦げ臭さが宙に漂い始めた。海斗はその時のことを見つかり覚えている。視線を自分の左手に移した。

「ぶつかつた壁に少し血が付いていて

ただ、『特別に力が強い左腕』を使ってパンチをしただけだった。たつたそれだけなのに、相手は漫画のように道場の壁に激突して、重力にしたがつて床に倒れた。一瞬、映像が停止したように間が空いて、悲鳴と共に再生ボタンが押された。対戦相手の口からは泡が吹かれており、瞳孔も開きっぱなしになってしまった。

「海斗はホント、運が悪いなってー

後々、骨だけではなく各臓器にも深刻なダメージがあつたと、海斗は人伝いに聞いた。

「なんか大変だったね。その責任をとつてやめるなんて」

「元氣」が代名詞の奈津実には珍しい暗い音色が彼女の声に含まれていた。

ふとその事に気付いた海斗は、視線を上げる。これまた、奈津実

が珍しく真剣な顔をして彼を見ていた。そんな彼女の様子を見て、

海斗はふつと笑った。

「狭山らしくないな。というか、6年前のこと心配されても、仕方ないしさ。……怪我負わせたのは、わざとじゃなく、まあ、栗木の言つたとおり、運が悪かつたで片付いたんだよ」

「じゃあ、何でやめたの？」

「それは、責任を感じたからやめたんだよ。つつか、殺人鬼の話の後にしたから、俺が気にしているように、」

「そうかな？ 私なら、何もなくとも気にするけど。失恋を引きずるようなかんじで。まあ、私は失恋したことないけどね」

言いつつ、奈津実はテーブルに置かれた水入りのビーカーを手に取り、三脚の上に据えた。海斗は青い炎を吐き出すガスバーナーをゆっくりとビーカー下へ。他の班を見ると、この三班よりは遅れているらしい。なんだかんだ、手際は良いのだ。いや、ただ単に他の班がやる気がないだけだろう。

海斗がガスバーナーをビーカーに当てたところで栗木は、「取つてくるよ」

「ああ、悪いな」

この実験の主役、強塩基の水酸化ナトリウムを貰いに立ち上がった。

海斗は栗木の後ろ姿から奈津実に向き直つて、

「さりげなく自慢ですか、それは、私はモテますアピールですか？」
「違うよ。私はまだ付き合つたことないから、失恋とか分からぬつて事。告白はされたことあるんだけどね」

「意外だな」

軽い相槌のつもりで発したのだが、ここぞとばかりに奈津実は立ち上がりつて、

「私をそんな目で！－ 尻軽女だと思ってたの！？ わ、私だつて失恋は……シクシク」

どこの劇場だ、とツツコミを入れたくなる程に大根芝居。酷い酷

いわ、と田元に指を当てながら自分の席に座り込む。

(狭山の方が芸人にむいて)

だが、ある事に海斗の危険を感じするレーダーが反応した。ピコン、ピコンと注意を促してもいいぐらいの反応だ。

この三班が見事、クラス中の視線を一身に集めていたのだ。

まるで一点集中を練習したかのように皆が皆、二人を見つめている。

「ちょ…………」

クラスのムードメイカー的な存在の栗木英士君は水酸化ナトリウムを取りに班のテーブルには居ない。しかも、奈津実が立ち上がりた理由は、失恋とかそっち系の話であり、黒板の方から凄まじい霸気が伝わってくるのを海斗はヒシヒシと感じていた。異界の魔王をデコピンで討伐できそうな勢いである。

ヤバイつて……コレは。

黒板というか白衣が視界に入らないように奈津実を見ると、彼女も同じ様にやつてしまつた、と口を開けていた。

「えつと、謝るか？　いや、謝りましょうよ、狭山さん。多分、このままじゃ殺人鬼に会う前に殺される。いや、多分じゃなく入滅だよ！！」

「山紙君から、ど、どうぞ。私は時を見計らつて、行くから。うん、これでいいのよ。これでOK！！　奈津実」

「自己完結しないでくれ！！　」いうのは一人揃つて行くのが筋じゃないんでしょうか？　つつか、一緒に頼む！！　ほら、隣人愛つてあるじやん！！　敵も愛しましょうつてやつ！！」

「嫌だ。山紙君とじや嫌だ。真剣味ゲージがガクンと下がるもん！」

「敵じやなくて、足手まといだもん！！」

「いや、俺、真剣じやん！！　どうしても、いや

突然、影に覆われる。

ブリキの人形が軋んで動くように、ゆっくりと振り返ると、般若。いや、真帆ちゃん。

「若いっていいわね。ということで、居残り一人は、理科室掃除に

決定ね

「は、はい」

引き起こした偶然

奈津実が手を振る姿を遠目で見送る海斗。

たつた一人。商店街の淡い街灯に照らされて走る彼女の姿は、抜きん出た容姿や抜群のスタイルもあってか青春ドラマのワンシーンのようだ。一年生の証拠である黄色いリボンが胸に据えられたグレーのセーラー服も良く似合っている。海斗が着ている一般的な学ランとは大違いに、制服が栄えていた。飲料水のCMにオファーされてもなんら疑問は無い。

「おっ」

規定より短くする為にたくし上げられた、ピンクのチェックが踊るスカートが冬の風に捲れる。下着が覗かせないか心配したが、どうやら赤い体育着をはいているようで心配は無用らしい。損した気がしたがそれは気のせいだろう。

そして、奈津実の後姿は小さくなり、右に曲がって見えなくなってしまった。

「…………」

なんだか彼女を見送りしたみたいだな、と何処かともなく頭に浮かんだ海斗だった。しかし、奈津実の向かう先は自宅ではなく、バイト先のコンビニ。クリスマス商戦ということで、殺人鬼騒ぎにも物怖じしないらしい。困った勇気である。

普通に考えたら、こんな最中にアルバイトを控えるべきなのだろう。だが、従業員の奈津実が可愛らしくウインクをして曰く、「だつて、給料が上がるもん!! しかも、サンタのコスプレができるんだよ!!」

一応、その後も海斗も一緒に帰らないか誘つてみたが、「元バスケ部だから、心配無用!!」の一刀両断。完全に断られ、たつた一人で帰る事になった。7時からバイトしたとしてどれだけ稼げるか勝負だとも言つていた記憶がある。まあ、奈津実のサンタ姿はぜひ

とも拝見したいのだが。

「やましい事されると勘違いされたのか……」

彼としては、殺人鬼が徘徊しているだろう竜狩市の市内を一人で帰るのが嫌だつたのだ。いや、元を正せば、殺人が起こっている筈なのに居残り掃除をやらせる教師が悪い。

そんな不満を思い浮かべながら、空を見上げる。

「はあ、」

口から吐き出された呼氣が天に昇つて、予報通りの満天の星空にとけた。

遠くで電車が横切る音や、不吉な犬の遠吠えが聞こえる。前方に望めるビル群には星の輝きより明るい幾ばくの光が灯つていた。

「 つつか、さむつ」

まだ、十一月のクリスマス前。

観賞に浸るより、この寒さをどうにかしたい時期だ。

タクシーを捕まえて、今すぐ家に帰りたい気分だが、タクシーも、そもそも車さえ見かけない

(いやいや、その前に金ねえーだろ)

「はあ、仕方が無い」

スクールバッグを肩に掛け直し、両手を学ランのポケットに突っ込んだ。グチャグチャに丸められたレシートの感触がある。

(昨日のか…………まあ、先ずは家に帰るか)

海斗は奈津実とは別方向の右に向かつて歩き出す。

本来、彼が通っている通学路は右に曲がらず真っ直ぐなのだが、実際問題、右に曲がつた方が随分と近道なのだ。

海斗は営業中の店が見受けられる伽藍がらんとした商店街を抜け。螢光灯は灯っているが、人は見られないのだ。祭りでもあるのだろうか？

(なんかおかしいな)

何かが抜け落ちている感覚。だが、自分の思い過ごしかもしれない。

海斗はそんな感覚を商店街に感じながら、カーブミラーが突き立つ丁字路を左に曲がる。そして、暗い細道を抜けると四階建ての低いビルが立ち並ぶ背後。

所謂、裏路地に出た。

路地には広い間隔で街灯が立ち並び、少し先ではチカチカと瞬く電灯が、緑色の網が掛けたゴミを照らしていた。横を向くと、ビルの背面にはいかがわしいピンクや黄色のチラシが貼つてある。しかも、女性のお色気たっぷりの写真と電話番号つきでだ。暗くジメジメした匂いもほんの少し疎ましい。

前へ視線を正すと、彼が求めていた赤い自動販売機が「ゴミ捨て場」の真横に据えられていた。

「……、

自販機前に着き、ポケットの財布、百円玉一枚に十円玉一枚を取り 缶コーヒーと。

ボタン、と温かい缶コーヒーを自販機の口から取り上げて、プルタブをあける。

「普通だな」

味。

香り。

量。

全てが通常。いつも通りのコーヒーだ。

抜けていることなど、何一つ無い。

違和感などやはり思い過(レ)じ。強いて言うなら、カラスが抜け落ちていただけだ。

ブーン、と電灯に集まつた虫達がさざめいている。

「……いくか

缶コーヒーの中身を飲み終え、常の習慣に従い『グシャ』と『左手』でスチール缶を潰す。

いつも通り。

この奇妙な左腕もいつも通りに存在していた。

(力か……)

恐らく、左手だけではなく左腕。

いつから、この力が備わったのかさえ分からぬ左腕。恐らく、生まれた直後から。

異常に発達した腕力に、傷つく事のない表皮。誰にでも破壊力は理解できて、その力の原理自体には興味がない。ただ運が悪かった、で認識され、はい。おしまい。

それが嫌な訳ではなかつた。いや、どちらかと言えば、都合が良い。不良達に絡まれたとしても、何かを壊して脅してやれば、いざこざにならない。また、何か役に立てることがある度に、理由を繕わなくて済むのだから。

(でも)

でも、気持ちが悪い。

何故、運が悪いのか。

何故、誰も気付こうとしないのか。

力加減は自分の思い通りだと言つて。

誰が見ても、自分が悪いのに。

怪我を負わせた自分が悪いのに。

誰も責めようとしてない。

「まあ、いいか」

海斗は、フタが外されたゴミ箱に向かつて、拉げた缶コーヒーを投げ
のだから。
しかし、弧を描いた空き缶は「リサイクル箱の淵に辺りにぶつかり、再び
宙に踊る。

そして、自然の摂理により地面へ。

ドンッ、と。

それは背後。遅れて甲高い犬の悲鳴。

咄嗟に海斗は振り返った。

数m先には純白の肌の少女。闇を深めた漆黒の長髪に、一年生の証である黄色のリボンが付いた灰色のセーラー服。右手には柄頭から赤い布が伸びる物騒な光を宿す日本刀。足元には、墨で象られたかのような真っ黒の犬。それが腹部を切り裂かれてくたばっているまるで、それは御伽噺から伝奇から、抜け出してきたかのように異質。

そして、何より少女の瞳は、爛々とした光を灯す金色だった。じんじき

海斗は全身が粟立つのを感じた。

瞬間にその不気味な程の美しさに鳥肌を立てたのだった。

「なんで……こんなところに、いるの……」

少女の精緻に創造された人形のような顔には、すでに疑問が広がっていた。

しかし、その驚きに満ちた表情も一瞬の内に消える。

真顔に戻った少女は上空を見上げた。

海斗もつられて顔を上げると、

そこには背の低いビルと星だらけの夜空。

そして、影。形から推測して、くたばっている犬と同種であるドーベルマンを連想させるシリエット。

その影が地面に落下してくる

違う。向かつてるんだ。

だが、少女はそれに向かつて顔を上げただけ。避けようともしない。

衝突したら死ぬ。その言葉が脳裏を過ぎり、海斗は声を大に

「 火を万物の素^そ。自身が魔の量を喰らい、不变に盛れ」

薄紅色の唇が紡いだのは、命令。

無論、黒き犬が人間の言葉を理解する素振は見せず、地面に向かって落下を続ける。

だが、呼応したのは犬ではない。

赤光。

犬の背で赤い光が刹那に、瞬き、『犬が燃える』。まるで油を塗りたくつていたかのように、犬は炎に包まれ、落下方向が左に逸れる。

「…………、」

結果が知れたかのように、少女は火の玉に変化した影から、海斗へ金色の視線を変更した。

(なんだよ、コレ……)

炎の残像を焼き付けたまま海斗は動けなかつた。

喧嘩なら何回か経験がある。しかも、複数相手にあるのだ。しかし、これは根本から『何か』が違う。

人間としての枠組みで起こっていることではない。まるで、力が過ぎる左腕を使って、化物と戦うかのような漫画的展開。そして、お約束のような艶やかな少女。

(いつも通りじゃない……)

地面にぶつかった犬は一度バウンドをして、動かなくなつた。それは時が止まつてしまつたようだつた。だが、燃えついた炎は消える事ない。

轟々と炎は盛つて、凄まじい光量を生み出していた。その光が少女の逆光となり、暗く、だが、金色の瞳だけを依然と輝かせる。

「貴方は何?」

鈴の音のように玲瓏な声が海斗の耳に届く。

しかし、彼の耳に届こうが質問の思考に至る訳がなかつた。頭の中では状況を理解しようとしたが、混乱が渦巻き、冷静にはなれない。

「聞いてる?」

段々と足音が近づく。

「答えてくれないと私が困るわ」
もう一言、

「丁度良い。手間が省けた」

人型の影がふんわりと地面に舞い降りたのが海斗に見えた。
それは童話の天女のように、だが不吉に。少女の背、海斗の視界
に降り立つたのだ。

足がない死体が一人。

頭がない犬が四匹。

腕がない死体が二人。

胴体がない死体が一人

存在しない化物が一人。

殺人鬼が一体。

舞い降りた男は黒かつた。

黒き雨具

舞い降りた男は黒かつた。

夜よりも何よりもただ黒かつた。

身長は高くはない。恐らく、160cm後半程度だろう。黒い雨合羽で身を包み、人間らしさはその少年とも老人とも、男性とも女性とも見分けができない人型のみ。雨合羽の材質なのか、燃え上がる炎の光を跳ね返すように光沢を放っている。

黒髪の少女が振り返る。

「わざとやつたの？」 加川

「一から十まで教える気はない。まあ、第一ラウンドはお前が守りたくて仕方がない『一般人』を殺されないように戦うんだな。龍の姫」

少女の瞳に、強い殺気が宿つた。小枝のように白く細い指で強く柄を握り、ゆっくりと雨合羽に向かい歩き出した。

雨合羽は、フンッと笑い、

「おい、起きる」

鼻にかかる男の声。それに合わせ、くたばっていた黒犬がビクッと跳ね、ゆっくりと立ち上がった。腹が切り裂かれている犬の腹部からは、汚泥のような物体が漏れ出ていた。

「グルルルル……」

威嚇するように鳴き始めた犬。その頭を雨合羽はなだめるように撫で、

「あ～あ。犬をこんなにして……、確かお前は犬好きじゃなかつたか？」 しかも

雨合羽は背後の炎に一瞥した。

「あの犬もあんなに燃やして」

「あの犬？ そのつきはぎが？ まず犬に見せたいなら、人間の足を使うのをやめたらどう？ 気持ち悪いだけよ。お前の腐り切った

根幹が露呈してゐるわ」

少女は顎を使い犬の脚 人間の足の形をした黒い脚を指した。

まるで、少女の馬鹿にした声色を理解したかのように「ワンッ！」と犬が吠え返した。

「今は、訳の分からない不況だから仕方ないだろ。なかなか、元気の良い野良犬が育たないんだよ。だから、人間を使ってあげているんだ。ああ。私が力ス共を使うことによって、一種の食料自給率のアップと〇〇削減に一役買っていることも忘れるな」

明らかに嘲るような口調に、失望したような少女の声がもれる。

「お前は……」

「もつたいぶるな、龍の姫」

雨合羽は黒犬の頭から撫でる手を放した。グルル……、と犬も喉を鳴らすのを止めた。

「やつぱり無理ね」

黒犬が地面を蹴つた。

駆けるというよりも跳ぶように進む犬。そして、獲物を狩るために地面を蹴り上げ、両顎を縦に広げる。

「 ジヤマ」

右から左へ。銀の刃が横合いから押し退けるように当たられ、両断。一枚に捌かれた犬は鳴き声の代わりにベチャ、という音を地面と奏でた。少女は日本刀にべた付くタールのような液を振るい剥がし、瞬時に重心を据えるように腰を屈めた。踵が浮き、次の瞬間だった。

少女は破壊音を発生させながら、弾丸のように飛んだ。破壊音の音源は路地を碎いた踏み切り。

雨合羽との彼我の距離は一気に縮まり、至近に至る。

「死ね」

少女からの死の宣告。

剣先がコンクリートと火花を散らしながら半円を描き、雨合羽を逆袈裟に分かとうとする。

が、雨合羽はそれを予測していたかのように、すでに一步身を引いていた。

「切つ先が空くうを切る。

少女は一瞬だが苦い顔をして、後退しようと地面を蹴りつとするが、

雨合羽の腹部。そこが、ビール腹のようにぼこりと膨れた。

「食われる」

そして、膨らみが粘土のように形が変わり、犬の顔が変貌。両顎を広げて、後退の為に宙に浮いている少女へ突進。予想に反して、少女の表情は驚きに染まつていなかつた。

着地した瞬間、軽く飛び上がる。彼女の真下。猛スピードで通り抜けようとする犬の口を足場にし、更に後ろへ跳んだ。

「キヤン！」犬の頭は踏み切りにより地面に勢い良く叩き込まれた。

無駄の無い美しい着地をみせ、少女は視線を上げた。

「もう、人間でもないなんて…………。この化物」

伸びた犬の頭がズズズズ……雨合羽の腹部に戻り、完全に收まる。ぽつこりと膨れ上がった腹部もただの黒いレインコートに戻つた。

「化物？ 化物はお互い様だろ？」

「お互い様？ つぎはぎの化物。ううん。化物の成りそこない。それ以前に、魔術師の成りそこないには言われたくないわ」

「馬鹿を言うな」

雨合羽は、袖の端から覗いた肌色の人差し指を少女に向けた。

「貴様らの方が成りそこないだろう。魔の業を駆使しながら人間の器を保とうなんて、この世の理に離反している。力相応の姿に変えないなんて、矛盾しているな。本来の魔術師はこういう存在なんだ」

「私達は、矛盾を孕む者よ。世界の摂理を歪めてまで、戦っているの。なら、一々理に従う必要はないでしょう？　しかも、お前のような『化物』になつた覚えは無いわ」

「それを言つなら、人間と化物の境界はなんだ？　境界線は何を以つてして規定している？」

「そんなの、『人間』の無意識よ。化物」

「…………見解の相違だな。このままでは禅問答だ。化物」
雨合羽が笑つた。顔は目深に被つたフードにより分からぬが、嘲笑にも似た雰囲気が彼の周りに漂つた。

「じゃあ、面倒だから負けたほうが化物ってことにしましよう」「ふん。調子乗るなよ、魔女ごときが。いや、今日は。調子は悪いのか」

訳が分からぬ。

それが海斗の感想だつた。漠然的な畏怖や不透明な恐怖より、そんな純粹な疑問が最初に浮かんだ。

（化物？ 魔術師？ 何を言つているんだ。こいつらは）

見れば、地面上でドロドロと融解し始めた黒い犬が化物なのは分かる。

しかし、これは魔術なのか。

日本刀を使い、ただ単に化物を討伐するだけ。
どちらかと言えば、魔術といつよりも自分
い感覺がある。

海斗は自分の左手に目を向けた。

もし、あの少女が魔術を使つてゐるのならば、この左腕は魔術な
のか。ならば

突発的な破壊音。コンクリートが砕けた爆音。

それは雨合羽の肩口から生えた三本目、四本目の光沢がある黒い腕。それによつて、発せさせられたのだ。片や、少女は何事も無かつたかのように立つてゐる。どうやら、雨合羽の一撃は当たつていなかつたようだ。

(よかっ……)

突然、ふつと我に返つた海斗。

(何、安心してんんだ、俺！… なんで冷静なんだよ！…)

考えを切り替えるように、頭を左右に振る。

現在、あの『化物』一體は殺し合つてゐるのだ。それこそ、見れば分かる。

(早く)

思つたことが素直に彼の口から、

「逃げないと、」

プルルルルル……、と携帯の着信音。しかも、この間の抜けた音は海斗がEメール着信音に設定している電子音だった。(なんでこんなときに！…)

慌ててポケットに手を突つ込み、着信音を止め、咄嗟に顔を上げると。

少女と雨合羽の戦いが止まつていた。海斗に注目する形で。

動いたのは、焦るよつて少女の唇だった。

「なんで、まだ！…」

「それは

ゾゾゾ、と突然、悪寒が走つた。否。すでに戦闘開始直後には彼の身体は怖氣を帶びていた。

それをフードの隙間から初めて確認できた、雨合羽の不適な笑みに気付かされたのだ。その三日月状に歪んだ唇は血を吸つたような赤色だった。

(殺される……?)

その思いに反して、まるで足が石に変わつてしまつたかのよつて動いてくれない。

「運がないな、お前……」

確かに聞こえた雨合羽の声。次の時には、雨合羽は地面を蹴つていた。化物としか形容できない速度で雨合羽は、少女の脇を抜け、海斗へ。

しかし、瞬時に少女は尋常ならざる筋力により生み出した圧倒的なスピードで、雨合羽の前へ回り込む。ブレーキを掛けた少女の足から、砂煙が上がった。

「行かせるわけないでしょ。ヘカトンケイル紛い」

雨合羽の三本目、四本目の黒き腕が振り上げられ、

「ふん。邪魔だ」二つの拳が振り下ろされる。だが、一つは少女の左手に納まり　もう一方は、日本刀により切り裂かれていた。肘から下が粘着性を有す黒い液体を飛ばしながら宙を舞う。

しかし、笑ったのは雨合羽だった。

突然、少女が飛び、いや、飛ばされた。ザザザ、とロンクリートの地面を滑つて、丁度海斗の眼前で、刀を杖にして体勢を立て直したのだ。

海斗は目の中で立ち上がった少女の肩越しに、見た。雨合羽の横腹から一本、新しい黒き腕が生えているのを。

これで雨合羽の腕は、合わせ五本。

「油断したな、魔女」

しかし、雨合羽の声に反応する事もなく少女は後ろを振り向く。「逃げて、お願ひ」

海斗の動悸が、ドクンドクンとさらに狂つた。それは少女の黄色い瞳に為でも、ましてや戦闘が震むほどの彼女の容姿でもない。懇願するような言い草だったからだ。

(んだよ。それ)

ここで怒鳴つてくれれば逃げ出せたかもしれないのに。

上手く言い表せない気持ちが海斗の心中に渦巻く。

海斗の心情などお構いなしに雨合羽がスタートを切つた。

黒髪が半円を描く。そして、少女は向き直つた。

「死ね。魔女」

それは一瞬にして距離を縮め

「爆ぜろ」

少女の声を起爆剤に、肩口から生える一本目の黒き腕から炎が上がり、爆破。破壊による土煙が三人を覆う。

「バカめ！！」

視界不明瞭の中、バチンッ！！ といつ破裂音と共に空気、砂煙が吹き飛ぶ。

そこには脇腹から生えた黒き両腕を両手で受けとめている少女。

「……………これで逃げられない」

「何故、殊^たち刀^たが使わなかつた？」

柄から赤い布が伸びる刀は地面に突き立ててある。

「今から、死ぬのに教える必要ある？」

「ああ、確かに、」

雨合羽のフードの隙間から弧月状に歪む唇が、海斗の眼^{まな}に映つた。
「死ぬんだ。お前がな」

六本目。雨合羽の肩口から元々生えていた腕が変形し、丸太のように太く、力強い腕に変化する。

海斗には分かつた。

その腕でこの少女を殺すのだと。

自分を守っている少女を殺すのだと。

人間の顔ほどある大きな拳が上へ。勢いをつけて、潰し壊す氣である。

彼の左腕に熱い『何か』が水流のよう迸った。

(くつそ！！ 何やつてんだ、俺！！)

強い感情、脅迫觀念に近いものだった。海斗の『過ぎた力を保有する』左手は伸びていたのだ。無論、黒き腕と拮抗するために。少女の後ろから。

「何やつて『たんだ』俺！－！」

黒き拳が吸い込まれるよづ、「その手の平へ。

彼が戦つた理由

空気が弾けた。

空間がしなり、新しく生まれた風で全てを弾いた。

そして、ただ、無音だった。

「 ッ！ ！」

反作用が左腕から走った。そして、身体の芯、骨の髓、脳天まで凄まじい振動が身体中を駆け巡り、暗黒に呑められていた視界が真っ白になった。左腕の感覚も吹き飛んでしまっていた。立っている事さえも危うい。

「なんだ、コレは」

それは雨合羽の驚きに満ちた声。

その声に催促されるように海斗は瞑つていた目を開き、感覚が失われた自身の左手に目を向けると、
がつちり、と黒き腕を受け止めている。しかも、黒き腕には亀裂が走り、今にも砕け散りそうだ。一方、自身の腕にはダメージ一つない。

「…………、」

少女の息の音が聞こえる。

自身の心音、息づかいが耳を叩く。

同時に三人の時間が止まった。

それは主観的には長く、しかし客観的には短い。

最初に動いたのは海斗だった。

感覚が多少戻った左腕を振り払い、亀裂が走っていた崩壊寸前の黒き腕を破壊。それは地面に落下し、砂糖菓子のように黒き腕が弾ける。

「 ッ ! !

続け様に海斗は左拳を握り、殴り飛ばそうとする。

が、雨合羽は大きく後ろへ飛び、避けた。

空振りに終わった海斗は、「くつそ、感覚が……」拳をさりげに強く握る。

そして、呆然とする少女の肩に手を置きながら、守るよつに彼女の前へ。

「なんだ。お前。なんだ？ 魔術師なのか？」

「知らねえーよ。んなこと」

「…………なんだ、お前は」

雨合羽は決して動かなかつた。何かを考えるよつて、まるで海斗の左腕を恐れるよつてその場を動かず、黙り込んだ。腕を重力に従わせ、攻撃する素振を見せない。

一方の海斗は、意外にも冷静だつた。

(まずは逃げねえーと)

彼の中でもう考える事をやめた。アレはアレ。コレはコレと割り切り、とにかくこの場をどうにかしようこうと考えていたのだ。

チラッと横目で少女の様子を見る。

顔が赤い。恐らく、緊張や戦闘による体温上昇ではない。彼女の顔は病的に火照つてゐるのだ。聞こえてくる息も絶え絶え。黄色の大きな瞳がどんよりとしている。

海斗が冷静になれた要素はコレである。

息を荒くしている少女を見て、今すぐ逃げて休ませないとこう考えに移行したのだった。

緊張の糸が切れたかのよつて、状態が急変したのだ。何故、こんな体調で戦えたのか不思議である。もしくや、魔術とやらで、体調を一時的に回復させたのかもしれない。

海斗は己を奮い立たせ、

「 雨合羽 ! ! 言つておぐがな、俺は強いぞ ! !

無論、フェイク。勝てるのは不良相手のみ。騙せたのも馬鹿な不良

のみだ。馬鹿でなければ騙せない。

「今なら、逃がしてやる！！ 消えろ！！」

「…………くそ！！ いきがるな！！ 一般人！！ 多少の能力持ちでー！ 私に勝てると思つてたのかー？ 大体な、私の一撃を防いだ程度でー！」

雨合羽の激昂。

(失敗した！？ いや)

失敗しているなら攻撃していくるはず。しかし、雨合羽は戦闘を行ふ様子はない。ただ、怒鳴り返しただけだ。

(もしかして、この左腕をビビッているのか？)

あの雨合羽は疑心暗鬼に成つていて可能性が高い。

なら、そこにつけ込むしかない。真正面から戦つても勝てる訳がないのだ。

「多少？ ジャあ、やるかア！？」

「ああ！！ ぶち殺して」

ヒラリと、三枚。陰陽道を連想させる白い札。

それが海斗と雨合羽の間で宙を舞い、コンクリートに着地。途端、三枚同時に中心から焦げ始め、ボウツと前触れもなく燃える。まるでそれは鬼火。その炎が周りの酸素を吸い猛烈な火力の炎に。そして、雨合羽側と海斗側を一分するかのような巨大な炎のカーテンに変化する。

「なんだ、これ……」

熱くない。放射熱を感じないので。ただ単に光のみを放っている。しかも、炎は透過せず、雨合羽側の状況が確認できない。

すると、声。

「逃げるー！ その子を背負つて逃げてくれー！」

それは雨合羽の声ではなく、若い同年代程度の切羽詰つた声だった。しかも、炎の向こう側から聞こえてくる。

「ちょっと、待てよ！！ 逃げろって！！」

いきなり逃げると言われても、海斗には状況を判断できなかつた。

「いいから！！ 刀は僕が回収するから、とにかく琴無さんを！！」

「大体、アンタは！？」

「そんな事、どうでもいいから！..」

「じゃあ、アン

「少し戦う！..」

「それ、」海斗は言葉を返さうと口を開いたが、背中の感触に声が詰まつた。

学ランが弱々しく掴まれた感覚。咄嗟に振り返る。少女の眼は空る。焦点が合つていらない。

「はあ……はあ……はあ」

海斗は、嫌がつて手を弾くこととする少女の額に、力ずくで手を当て、病状を診る。

(なんつー熱だ……)

海斗の予想以上に、熱は悪い。立つてこと自体が彼女の症状を悪化させているのだろう。インフルエンザを連想させる。

「戦う。君はどいて。私が守る……」

少女は絶え絶えに呟いた。海斗の身体を脆そうな白い手で退けるよう、もう一方は地面に突き立つ刀を取ろうと伸びてゐる。しかし、海斗の身体はビクともしない。それは彼女の力が弱すぎるからだ。炎のカーテンの向こうから、爆破音が聞こえてきた。戦闘が始まつたのだ。コンクリートが破壊される音は、あの雨合羽の腕が碎いた為だろう。

「私がやらないと、守らないと」

少女の力が増した。しかし、弱い。まるで児童が力士を力いっぱい押しているように、彼を退かすのには力が足りなかつた。

頭の中を色々な事が過ぎつた。

「一般人は戦つてはいけないの。だから、私が……守る」

彼女は何なのか。

あの雨合羽は何なのか。

新しく現れた男は何なのか。

自分の左腕はどうなつてしまつたのか。

この少女は何の為に戦うのか。

次から次へと不安に似た考えが、止め処なく生まれてくる。

「くつそ！」

頭を振り、少女の細い腰に手をかけた。少女の手から引き抜いた刀が落ちる。

もう、どうなつてもいい。

「な、何をするの……」

「逃げるんだよッ！－！」

そして、もう片方の手を膝の裏に当てて、少女を持ち上げたのであつた。所謂、お姫様抱っこだ。少女は想像通りに軽かつた。しかも、身体を揺らして抵抗する力も弱過ぎる。

そして、彼女の身体は、物の『夢』を感じさせるほどに華奢であった。

手順と名前

ぼやけた視界が鮮明になる。

少女が目にしたのは、白い明かりが点いた天井だった。カバーが外された為、円形の蛍光灯はむき出しで、埃が溜まっているのが目に入る。一目見て、この部屋が使っていないことが伺えた。潔癖症でもなんでもない彼女にとつては、どうでもいい些細なことである。一々、汚れを気にしていたら、こんな仕事をひさぐ事はできない。まあ、少しばかりの埃っぽさは否めないが。

少女は寝返りをうつように横を向き、もう一度寝ようかな、とよろしく機能しているはずもない頭にそう浮かべた。端的に言えば、このふかふかのベッドの中でぬくぬくして、絶贊怠慢したい気分なのだ。

(寝よ。昨日、遅かつ……)

ハツと何かに気付いたかのように大きな黄色い瞳を見開いた少女。ガバッと起き上がり、

「と、というか、こいつビビー。」

「ああ、起きたか」

男の声が聞こえ、少女が声のした方を向くと、

明るい茶髪が印象的な少年が、読んでいた漫画本を近くにあった机に置き、立ち上がった。身長は145cmの自分より頭一個と半分ぐらい大きい。

「ここは俺の家」

山紙家、一階。空き部屋。結露が滴る窓からは斜光が差込み、部屋の隅に取り付けられている暖房もガンガンに稼動している。うつかり油断をしてしまえば、寝てしまいそうな空気感である。壁際に

並んだ衣装ダンスも使われた形跡もなく、取っ手としての凹みには埃が溜まっていた。

「つてな訳」

そんな中、木製のイスに腰を下ろす海斗は、黒髪の少女にこの状況に至るまでの一通りの説明を終えた。しかし、少女には反応がない。ただ、小学生が微分積分を教えてもらっているかのようにボオーとして、海斗の顔を見つめている。

冷却シートが彼女の幼い顔つきを相乗効果的にさらに幼くさせている。十六歳の自分より何歳も年下に見えた。いや、恐らく年下だろう。もしかしたら、本当に大人っぽい小学生かもしれない。

「ね、寝ぼけてんのか？」

「…………」

やはり、反応なし。仕方ないので、気を取り直しもう一度。

「えっと、寝ぼけてるんですか？」

「…………。私の裸、見た？」

「え？」

「え？」

海斗は固まつた。話の流れをぶつた切るような「君は犯罪を犯しましたか?」発言。ほほ、初対面の相手の第一声がコレ。戸惑わないほうがおかしい。

すると、固まつた海斗を見計るように少女は自分の身体を見て、口を開く。

「私の服が変わっていたから」

「ああ。いや、それは母さん。そう。俺の母親が着替えさせたんだよ」

少女の服装は、海斗の母 山紙繪美の灰色スウェットに変わっている。しかしサイズは合っておらず、少女の方が繪美に比べて背も胸も小さいせいか、ダボダボ。

海斗の方も着用頻度が高い家着専用のパーカー。

「じゃあ、私の制服は?」

「そこの机に置んであるよ」

少女は漫画本が置かれた机を見、自分の制服が綺麗に置まれているのを確認して、安心の太い息を吐いた。

「はあ、よかつた。あれは高かつたから……」

「やつぱり、制服は高いのか……やつぱり制服は高いよな（でも、学ランの方が高そうだよな…………って……）」

「ちげえーよ……そんな値段の話じゃなくて……アレだよ……昨日の話だよ……あつぶね、流されるところだった」

「お金は大切だと思う。一円を笑うものは一円に泣くつて言ひじやない。そういうえば、私の刀は？」

「あ？ ああ、赤いヒラヒラが付いた刀は変な男が回収するつて言つてたぞ。変な男つてあの雨合羽じやなくて、新しく現れた男ね」「足狩かしら……」

「あしがり？」

恐らく、あの男の名前だろ？

「うん。仲間の名前よ。今回というか、大体一緒に行動しているパートナーよ」

「仲間？ いや、何の？」

「魔術師の」

隠しもせず、少女は言つた。言つてしまつた。

海斗自身も戦闘の最中で聞こえた魔術、雨合羽から問われた魔術師という言葉の意をしりたがつたが…………。胸に秘めたワクワクが急激に萎んでいく。

「…………とも当然に言つた。こうこうのつて、なんか回りくどく教えるんじやないか？ つか、隠すだろ普通……」

「戦闘見られといて、一々隠すなんて無駄だと思わない？」

正論。そう思わずにはいられない少女の言葉。問い合わせのはずなのに、正解を突きつけられたような気持ちになる海斗。

「ま、まあ、確かにそうだけどさ。俺の方も心の準備が必要だから」「準備つて、魔術についての話？」

「それもあるけど、俺の左腕について。もしかしたら、神話時代に世界を席巻した邪神、ダーク・デストロイが宿っている可能性が」

「

「ただの能力よ」

「え？」と海斗は愁眉を潜めた。

「魔術的な潜在的、先天的、または後天的な力。普通の人間には備わるはずがない異能。存在を無意識に追いやられた能力。気にしなくてもいい。だって、外的变化が見られないもの」

「…………、さあ～て。先ずは魔術の話からしないか？ 理解するのが難しいというか、無理だからさ」

視線が下がり、少女の顔が曇る。だが、瞬時に冷静な表情に戻つて、唇を開く。

「君は魔術を知つて何をするの？」

海斗にとつてかなり意外な質問だつた。てつきり無条件で教えてくれるのかとばかり思つていたのだ。

海斗はなるべく当たり障りがないように、「そりや、俺の左腕が関わつていれば魔術について知りたくなるだろ」と答えた。

すると、少女は追及するように、

「じゃあ、もし魔術を知つたからつて戦うとかそんな気はないの？」

「え、い、いや」

海斗は少女の搖らぐ事のない真つ直ぐな視線から外れるように、顔を背けた。

彼も男だ。少しは勸善懲惡のストーリーは憧れるし、魔術なんていう幻想的な言葉を聞いたら心は高揚する。魔術を使ってみて魔界のボスと戦つてみたい。

「ハア、と諦めるような軽い溜め息。そして、

「魔術というのは、世界のルールを捻じ曲げる業。世界に干渉する力よ」

向き直った海斗は首を傾げた。

「ん？……分からん。なんか、抽象的過ぎて分からないだけだ」

「じゃあ、詳しく話す。まず、君は世界親ベースとか龍樹ナガールジュナを知ってる？ 縁起説に関係あるんだけど」

勿論、海斗は首を横に振った

なんだ。偉大な魔術師か？

少女はまあ、当然かと咳き、

「…………魔術師視点から観測するこの世界。私達は世界ベースと呼ぶんだけれども、その世界は人類の認識により存在しているのよ。例えば、空を見上げれば、空を認識できるよね？」

海斗は、ああ、と縦に頷き、簡単に相槌を打つた。

「それを必要十分条件的に認識できるから空を見ると考えた場合が、この世界の、世界ベースの成り立ちなの。私も観念的だから苦手だけど、人間達がそれを認識することでそれがそこに存在するのよ。つまり、物理法則は、人類が……知的生命体がそれを認識するから、定義されるのよ」

「つつことは、SF的な感じで、バーチャルリアリティみたい感じか？ 人間がそれを本物だと思えば、それは本物だと定義されるのと一緒で」

まあ、脳は関係ないけど、そんな感じと少女は肯定。

そうしたら、少しおかしい。

海斗はそう思った。

もし、魔術が世界のルール、人間の認識を捻じ曲げる技巧だとしたら、まるで魔術を使っている自分達が人間ではないと肯定することになる。先ほどの認識による世界構築の理論を用いると、人間もまた他の人間の認識により存在している事になるのだ。もし、認識を捻じ曲げられるのならソイツはもう、人間ではない。

そう海斗は思い、その通りに目の前の少女に説明をした。

すると、彼女は、

「でもね。私達を構成している認識は人間の認識じゃなくて、世界からの認識なの。私達、魔術師はこの世界も一つの知能として扱っているのよ」

「？」

海斗は強く疑問を呈した。

「簡単に言えば、世界^{ベース}は一つの知能生命体つてこと。そして、その認識、人間達の認識に構成された世界が作り出す物質的な認識をいじくるのが魔術よ。でも、」

「難しそうだろ」

「そうね。私も嫌いだもの、魔術の公理なんか。はつきり言つてどうでもいいし世界^{ベース}からの認識と人間の認識が、どちらが先かなんて聞かないで」

魔術師らしからぬ発言をする少女。

「それって、魔術師としてどうなの？」

「じゃあ、君は車を乗るとき、車の構造を一々、浮かべながら使う？ 普通はプロのレーサーでもしないでしょ？ ただ、走らせるためだけのプロセスを踏んでいくだけ。ただ、それだけでしょ？ 魔術も同じで、魔術発動までの手順を踏むだけよ。まあ、どうしてもつていうなら、物理法則について考えてみて」

「物理法則？ 等速直線運動とか、か？」

「ええ。例えば、物理法則つて人間が決めたことよね？」

「ああ。でも、この世界の原理だろ？」

「それは『人間』の実験作業と、認識からしたらね。でも、この世界を作り出した神様。ビック・バンの原因を作り出した神様からしたら間違っているかもしれないでしょ？ 本当は天動説が合つてゐるかもしれないし。結局、宗教で疑問を解決していくものを科学によつて解決しただけよ。呼び方だけが変わつて、本質的なことは何一つ変わつてない」

「そういえばそうだ。」

この世界は人間の認識でできていると考えれば、物理現象も人間

の認識によつてできている。

「だから、物理法則とは人間の独りよがりな究極の仮定。そう考へると、神様しか知らない本当の物理法則の中には魔術が存在してゐかも、でしょ？」とはいっても、神様 자체、人間の認識でできるつていう意見もあるらしいけど。でも、神様がいないと最初の認識を起こしたが者がないのよね

「そうだよな」

うん、とただ漠然に難しいということだけを理解し、海斗は頷いた。全てを理解していつたら、脳みそのキヤパシティーを超えてパンクしてしまいそうだ。

「私も自分で言つていて、訳が分からぬけどね。これは全部、にい……人からの受け売りみたいなものだから」

「だよな」

「うん」

何故か、親近感が沸く海斗。

ヒ、ヒロインは完璧じゃなくてもいいんだ！！　という叫びを抑えて、先ほどからずっと気になつていていた疑問を放つ。

「じゃあ、魔術の手順つて？」

「魔術の手順は、魔術的意味を表す行動、図を表現して、それに魔力を注ぎ込むだけ。魔術的意味とは神話とかから抽出したもの」「それだけ？」といふか、新単語の魔力を習つてませんよ、先生。バンジージャンプをやってみせた後に、ほら、簡単でしょ？　つて、言われてるレベルなんんですけど？　その先、教えてくれませんか？」

「教えないわ

スイッチを押してしまつたかのように少女の声に真剣味が増す。

「え？」

「だって、君は魔術を戦いに使わないんでしょ？　なら、教える必要はないわ」

「いや、でも。せつかくここまで教えて貰つたのに」

「君は一般人だし、私は魔術師なの」

強く、拒むような口調に海斗の口が止まる。

「……やっぱり、そうよね」

一方の少女は、そんな状況になる彼を待っていたのか、掛け布団をバサツと翻し、ベットの中から出て、額に張られた冷却シートを勢い良く剥がす。

「だから、君のお母さんにお礼を言つてここから出て行く」

「待てよ。お前、熱があるだろ。魔術を教えないともいいから、とにかく安静にしろよ。昨日、あんな高い熱が出たんだぞ？」

「君は一般人よ。魔術師と一般人は違うの。だから、」

しかし、首を振る海斗。

片や少女は、冷却シートをグチャグチャに丸め、ベットの脇に置かれた黒いゴミ箱に落とした。黄色い瞳には先ほどまでの人の間らしさは失せている。

「魔術側に踏み込んではいけない。たとえ、その左腕の能力を持ついてもよ。だから、君はもう私に関与しないで。謝つて欲しいなら、今謝るし、欲しい物があつたら、私がどんなものでも買う。だから

「そういうことじやない」

「じゃあ、君の左腕について？ 今分かることで言つと、君の左腕は魔術的能力で肉体的な力じやない。ましてや筋肉の質や密度は関係ない。また、外的変化がないから、特異なものではなくて、特別視をするには至らない。だから、もう私に関わらないで。魔術師は君達には、一般人は私達には干渉しないの。これが

彼は彼女をなんとなく許せなかつた。

どうせ、自分に関わると良いことがない。まるで少女は自分自身の運命を悲観しているように思えて、海斗の感情は荒ぶつたのだ。

「一般人？ 関係ねえーよ。魔術師とかじやなくて、可愛い女の子を見殺しにできねえーだろ？ 別にどれだけ偽善と言われ

てもいいけど。昨日の」と思えば、絶対ダメだ

海斗は拳を握った。

どんな言葉が返つてこよつが言い返す。そつ決めて、少女の言葉を待つていろと。

何故か、呆気にとられた様子の少女が立つたまま。

「可愛い女の子？」

「は、はい？」

海斗も海斗で何故か、語尾が上がつてしまつ。

「女の子って、言われたから」

「も、もしかして男なのか？ 所謂、流行の男の娘なのか！？」
あれ、シリアルス場面に俺、男の娘つて…………何、言つてるんだ、
という疑問は気にしない事にする。身を乗り出していく自分は自分
ではないのだろう。

「男の子？ 何を言つてるの？」

「それは聞き流してくれ。といつか、そつちこそ、女の子に反応す
るなよ」

「女の子だから守つて言われたら、氣恥ずかしいから。あと、可
愛いとか真顔で言われると恥ずかしいわよ」
(可愛い……?)

気持ちに任せて放つてしまつた言葉が海斗の脳裏でリフレイン。

可愛い……

可愛い……

可愛い……

を躊躇する。

いますぐ、何も見ないよつに頭を抱えたいといふ。顔から火が出
るとはこの瞬間だ。

「あ、改めて言つなよ……シリアルス的な雰囲気と相俟つて、すん
ごく恥ずかしいですよ……」

そんな海斗を数秒見つめて、少女はベッドに腰を下ろした。彼女

の体重が軽いせいか、ベッドがあまり沈まない。

「なんだよー！ その反応なんだよ！ 全然興味なさやつじやん。いま、自分の発言に俺悶えてますよー！」

「やうね。自分の言葉には責任もたないとな。お母さんって、元気いるの？ 早くお礼を言わなきや」

「こら、人の話を聞けー！ Listen とある気はないんですかー？」

「何で、英語？ 日本人なんだから日本語使つたら？」

「そ、それは、ゴーモアを醸し出したんだよー！ 冷静にツツゴムな。あとな、あらかじめ言つと、ゴーモアはカタカナだぞ」

「そう。じゃあ、お母さんは？」

「はあ……夜まで仕事だから、今はいなー」

取り合ひのはやめよー。どうせあしらわれるし。と海斗がガクッと頭を下げる、溜め息をついた。

「じゃあ、」

「あ？」

少女の言葉に反応し、海斗は面を上げた。

「夜まで居ようかな」

海斗は、彼女の顔が嬉々とした歓びの色に染まつていて、そんな気がした。

少女は、先程より頬を赤くして、窓の方を見ていた。風景など畳つて見えないはずなのに。

「今無琴無」

「ん？」

「名前……よ。琴無でいいわ」

協力と、消し炭の巨悪

『本日、未明、竜狩市内で発生している連續殺人事件の被害者がまた一人増えました。やはり、殺害方法は両腕をTVキヤスターがパネルを使って、殺害方法を事細かに説明していました。

山紙家、一階リビングには料理の美味しい香りが充満していた。味噌汁の香りから、紅鮭の香ばしさ。人間の味覚を刺激する匂いである。

そんなリビングにある四人掛けのダイニングテーブル。その一席に少女こと今無琴無は、灰色のスエットのままでちょこんと行儀よく座っていた。その隣には、「一日を無駄にしたな」と軽い後悔の念に苛まれる海斗。

彼はリモコンを使い、隅にある箱型TVの電源を消した。夕食時に、殺人事件の殺害方法についてなんて聞きたくない。

リモコンを青い箸に持ち替えた海斗はイスを正し、「いただきます」と習慣的に呟いた。

「めしあがれ。まさか。まさかの展開だよね、海斗。ホント、私が姑になるなんて」

海斗の向かい合わせの椅子に座る女性。彼の隣にいる少女よりも女性らしさの発育がよろしい、ウェーブの掛かった黒髪セミロングの女性 山紙絵美が海斗の言葉に呼応するように言った。

「そうか。母さん。仕事で疲れたんだな」

「でも、今日は早帰りだからそんなに疲れてないよお」

「かなりおつとり系の母親だがここまで鈍いとは…………」。

言葉の意味をちゃんと理解させるのも面倒になつた海斗。

「というか、」

そんな息子の心配など知る由もない絵美は、興味津々といった様子で琴無を見つめている。その穴を開けるような視線は服を選ぶと

きの視線に何処となく似てゐる、と海斗は紅鮭の身を口に入れながら思つた。

「可愛い……」

絵美はぽつりと呟いた。すると、用意された箸さえ握らない琴無は、絵美に向かつて大きな瞳で上目遣いをする。ウチの母親は何を言つているんだと思つていた海斗だったが、

「…………」横に見える琴無は今すぐにも抱き締めたくなる可愛さ。

勿論、絵美は海斗以上に、

「子供にならない？」

「おい。大分、話とびすぎだろ。最初の姑はどこに行つた」

「姑も母親も変わらないの。いいじゃない、妹が増えた感じで。ねえ？」

「え、琴無ちゃん？」

「え、いや、その

絵美の言葉への対処にかなり困つている琴無。

そんな琴無を助けるために、瞬間的に正気に戻つた海斗は、

「言つておくけど、今無は俺と同じ年だから、妹にならないぞ」

「つっそだ~~~~~」

「何を根拠に嘘だと決め付けてんだよ」

「でたでた。海斗の論理的な話し方。そうやって、いつもと同じ様に絵美ちゃんを苛めるの？」

「待て。いつもいじめてるつてなんだ。その虚偽報告はなんだ」

「だつてえ～、会社でえ～」

そして、絵美は会社であつた事をだらだらと愚痴り始めた。いつもの文脈ぶつ飛ばしのパターンだ。

愚痴の内容は昨日と同じ、部下からの猛アタックについて。

簡単に表すと田中君という社員から連口のよつて、冬でも暑苦しラブコールをされて、困つている。ということだ。婚活に努めている者からしたら、羨ましい限りのことだが、絵美には恋愛する気など毛頭ないらしい。失恋して職務放棄した教師もいるといふのこ……

(まあ、実際)

実際、絵美は実年齢よりも10歳は若く、見える。

一十代前半のような肌のハリや、読者モデルのようなスタイルの良さが若々しく感じさせ、彼女の年齢ではきつい薄ピンクのチークや田元に引かれたアイシャドーが一段と若々しさを助長している。恐らく、そのフレンドリーな喋り方も起因しているのだろう。

絵美の飽食的な愚痴を聞き流しながら、海斗はチラツと琴無に視線を向ける。

「…………、」

自分の時の威勢は消えてしまったのか。それとも、絵美の勢いに飲まれてしまつたのか。とにかく、琴無は絵美に、遠慮がちに視線を向けて、黙り込んでいる。白い両手も太腿の上に置いて、これではまるでお見合いだ。まあ、服装はだぼだぼの灰色スウェットだが。とは言つても、いきなり『魔術は認識を歪ます術なのですよ！お母様！』みたいな面倒が起こらなくていいことではある。

海斗はそう思い、青色の箸を右手で持ち、自分の夕食を食べ進めよう

「 そうだ。海斗。琴無ちゃんとはいっ子供作る気なの？」

「ん？」

「ん？ つてなに？ はあ、仕方ないな。次は一人に聞くよ？ 今

田の昼間、ベットの上でギシギシと何をしてたの？」

「何故にベット限定！？ 今日は一緒にテレビ見てました！…」

「テレビを見ながら？」

「違う！！ 激闘。ドリフ「コンキングVS竜王を見てましたよ！…

しかも、映画版でリメイクされた奴！！ 一回もギシギシアンアンなんかしてません！…」

「またまたあ～ 照れちゃつて。田中君みたいに純真なんだからあ

～。しかも、私、アンアンは言つてないよ」

「照れてねえ！！ つつか、照れるタイミングがねえよ！…」

「でも、顔赤いよ」と、絵美はベージュのマニキュアに覆われた指

で、ほのかに赤く染まつた海斗の顔を指摘する。

熱くなつてないか確かめるために顔を触れつつ、琴無を見ると、

「えつと………名前」

「そうだ。海斗は琴無に絵美を紹介していないとこに気付いた。「海斗。なんか、手の位置、ゲイバーのおねえみたくなつてる」絵美は海斗を真似るように左手の甲を左頬に当てる。しかし、海斗は意を返した様子なく、手を外した。

「いや、母さん。今無に自己紹介してないじゃん」

「そうだけ？　じゃあ、名前を言いまあ～す」

選手宣誓のように一四キと腕を上げる絵美。無駄にハイテンションなのは琴無がいるからだらうか。いや、いつもか。

「私の名前は山紙絵美。年齢は36歳でえ～、身長は156です。趣味は料理で、最近の悩みは、こりゃ性のない肩凝りと限度がない海斗の性欲。じゃあ、ヨロシク～」

「ちょっと待てえええい！！！！！　肩凝りの後の言葉！！　おかしいですよね！？　俺を何に仕立て上げたいんですか！！　世界を滅亡に追いやる性欲魔人？　それとも、色々と抑え切れなくなつた変質者？」

「海斗。考えてみて、ここで私が下ネタ言わなかつたら、ダメじゃない？」

ここは一所懸命に、といった表情で絵美は海斗に優しく語りかけた。対して海斗は身を乗り出し、「ダメじゃない！！　H口に貪欲な健全な青少年より先に下ネタを口にする親が何処にいるんだよ！～！」

「いいに」

そもそも当然のように絵美は自分を指差す。彼女の意見は確かにそれはそうなのだが、海斗的にはもう少し過剰反応してくれないと言葉を返し辛い。

「い、いや、まあ、ただけど。その、えつと。俺、何処で間違えた？」

「大丈夫。海斗は間違つてないよ。さて、自^じ己^己紹介終わつたし、ほ
ら。手塩をにかけたお料理を召し上がり。ほひ、琴無ちゃんも」

「…………、」

しかし、琴無は反応せずに黙つていた。

(まだ、熱があるのか)

昼間は無言で、ずっと家でTVを見ていたので、病状が悪化した事はないだろう。先ほど熱を測ったときには、37度まで下がつていたのだ。

「どうしたの？ 琴無ちゃん？ 遠慮してるの？」

絵美は小さな子供をなだめすかす時のような優しい口調で、琴無に問いかけた。

「あの、」

琴無は一息置いて、

「ありがとうござります」

はつきりと、濁りなくそう言った。

絵美は驚いたようだった。しかし、海斗の反応は母親とは変わつていた。

(そうだよな。母さんにお礼を言つたために残つてたんだよな)

たつたそれだけの理由でここにいるのだ。律儀と言えば律儀。そ
うではあるが、残る理由は熱があるからではない。熱が下がつたの
で結果オーライだが、本来、40度程の高熱なら病院に連れて行く
べきなのだろう。だが、何者か分からぬ赤の他人を、殺人事件で
騒然としているこの竜狩市の医者が見てくれるとは思えない。だか
ら、この家で休ませようと思つたのだ。しかし、彼女は休む事を断
つた。一般人に迷惑を掛けられないという意味が分からない理由で。
海斗は絵美の息を吸う音を聞き、視線を上げた。

「いいんだよ。だつて、熱が出てたんだよ？ なら、マザーテレサ
だって、同じことやつてるつて。大体、海斗の頼みだもん。母親と
しては少しばかり叶えたいでしょ？」

「……でも、迷惑は」

「他人が迷惑してるなんて、本当は誰一人も分からぬのよ。まあ、琴無ちゃんが迷惑してるなら、止めるけどね。あつ、でも、今日の夕飯は食べていって。残り物は出したくないし。節約よ。せ・つ・や・く」

そう言つて、一カツと人懐っこい笑みを浮かべた。

何だかんだ言つても、母親なんだなあと実感する海斗。やはり子供の操り方が上手い。

琴無は何とも言えない表情をしていた。こきなり、食えと勧められても、食べ難いのだろう。

「じゃあ、海斗の彼女

」

「違います」

「え？ じゃあ、なんで海斗は琴無ちゃんを抱えてたの？」

そんな訳で母親に幼氣な美少女誘拐犯疑惑掛けられた海斗だったが、そこはなんとか辻褄を合わせて、絵美には、「倒れてたんで、助けた」と説明はした。しかし、怪しい。とてもなく怪しい。と、ダイニングキッチン越しに、海斗は疑惑を含んだ視線を向けられている。もう少し息子を信じて欲しいっす、とは思つたが、普通に考えれば、ちょっとやんちゃして誘拐してきたという結論に寄り道する事無く至るだろう。

海斗はリビングのソファーに背を預けて、グーと返り返つて背筋を伸ばす。ポキポキと骨が鳴つて、疲れ気味の筋肉が伸びる。

「はああ……」

先ほどの夕飯が胃に溜まつて、睡眠欲を刺激する。風呂に浸かる前にこのソファーで寝てしまいそうだ。もう一度襲つてきた欠伸を噛み殺し

「ん？」

一緒にお笑い番組を見ていた琴無が、綺麗な金色の眼で海斗の顔をジツと見つめている。

まさか、と思い海斗は脣辺りを触り始めるが、どうやら米粒はないようだ。

では、何故この少女はこんなに目を凝らして此方を見ているのだろ？

(もしや……恋……)

そういうえば、憂いを帯びた瞳に赤っぽい頬。まるでこれは恋する乙女ではないか。クラスメイトの恋する少女と同じ様に気がする。(んな訳ねえーか)

結局、気がするだけ。もし本当に恋されていると勘違いしていたら、ソイツは自意識過剰を通り越して、ただの馬鹿だ。

海斗はそう心に吐き捨てつつ、TVに目を向けたが、

「ねえ？」

琴無の声がそれを阻んだ。海斗は彼女にチラッと視線を向いた。

「ん？」

「君は迷惑なの？」

「いや、何が？」

「何が？って、私と一緒に居て。君は迷惑だと思っていたの？ 迷惑なら言って欲しい。だつて、私は魔術師だもの。……だつて君は一般人だもの」

(そういう事か)

海斗は、彼女を見た。まるで刑事が容疑者を取り調べるような、そんな真剣な表情で。

「…………なんで、そんな事聞くんだ？」

「なんでって…………」

絵美の言葉に感化されて、自分の心情を探りたくなったのだろう。海斗は琴無の言葉を待った。

「…………、」

だが、琴無は下を向いて、黙り込む。一人の沈黙にバラエティー

番組の笑い声と、台所から水道から水が流れる音が滑り込んだ。

(なんか、俺、虜めてるみたい……だな)

しかも、暴言ではなく質問で、だ。だから、言い返しようがないのだ。暴言なら暴言で反撃できるが、質問には答えを、自身の意思が備わった考え方を見せ付けないと反撃ができない。

「えつとな」

海斗の声に琴無は顔を上げる。右手で頬に掛かつた黒髪を退けた。「はつきり言うと、迷惑してるよ。いきなり、目の前に現れて、魔術師なんて言われて、意味も分からず一日過ごして、意味も分からず出て行くんだろう？　なら、迷惑してない訳ないだろ」「琴無は視線を下げた。

「実際、お前だつて迷惑してるだろ？」

そんな訳ない、と頭を横に振る。

「んじゃあ、迷惑じやないのに、出て行くのか？」

「決まりだからよ……。魔術師は一般人には干渉してはいけないの」「そんなん、誰が決めたんだよ。政府か？　俺は魔術師の存在なんて知らなかつたぞ？」

海斗はテーブルの上からTVのリモコンを取る。

「客観的に見ればな、他人がやることなんか迷惑だらけだろ。実際、本人は迷惑してないのに」

自分の、魔術的能力が宿る左腕は逆だ。

人に大怪我を負わせても、裁かれない。偶さか、怪我を負わせて仕舞つたことになっている。だから、世間からは運がなかつたと決め付けられた。しかし、怪我を負つた張本人からしたら迷惑していたのだ。

「でも、君は迷惑でしょ？　魔術師が居たら迷惑でしょ？」

「俺は、多分」

少し琴無は、視線を下にやつて残念そうな顔をした。

海斗はテーブルに置かれたリモコンを取り、TVのチャンネルを適当に回し始める。やはりこの時間帯だとドラマが多い。

「でも、母さんは

「…………」

琴無の視線がキッキンに変わったことが、横目で確認できた。

「あと、魔術師』は『一般人に干渉しちゃいけないんだろ?」

「…………」 琴無は一度だけ、縦に頭を振った。

TVの映像が、あるアニメに止まる。

それはTVシリーズでは好評のはずのアニメの劇場版だ。この作品は、作画以外の評価は芳しくない。視聴済みである海斗からしても、面白いとは言えない代物である。理由は簡単で、勸善懲悪が極まりすぎて話に捻りがなく、次のシーンが大体、どうなるかが分かつてしまうのだ。

どれだけ、時間が流れただろうか。恐らく、CMが一回程挟んだところから言って、30分。

やつぱり暇になつた海斗は、リモコンを取る。

「えっとね。私、君に手伝つて欲しいことがあるの」

「いきなりだな」 海斗はTVのリモコンをテーブルに置く。ガラステーブルとリモコンがぶつかり、コシンと間抜けな音を奏でた。

「一般人からしたら迷惑だと思つけど、君は迷惑か分からぬから頼むわ」

なるべく顔に表情が出ないように海斗は堪えた。

琴無は続けた。

「この町を案内して欲しいの。私、この町に一回も来たことないから。あと、君を絶対戦わせない。絶対、守るわ。だから、君も戦わないで」

なるべく少女の顔を見ないよつに海斗は堪えた。

「それって、今日か?」

「明日でいい」

アニメの方は終盤に差し掛かつており、ボロ雑巾のよつになつた主人公が根性論で立ち上がつた。

「じゃあ、今日はどうするんだ?」

「…………宿がないの」

「なら、丁度いいな。俺の家に空き部屋あるや」

ダイニングキッチンの方から「お風呂びいするわ~」といつ間延びした甘ったるい声が聞こえてきた。

「今無。風呂どうするんだ?」

海斗は冷静を装い、いや、クールを装い琴無の方を向いたが、「な、なんで、笑ってるの?」

口角が上がっていた。無論、高揚感を抑え切れなかつたのだ。「いや、これは元々の顔です」

「…………」

「引くな!! あからさまに引くなつて!!」

「ちよつと、海斗~。セクハラ? 痴漢なら満員電車でやりなさい」
海斗は身を翻して、正論を言つてのけたぜ!! と言いたげなドヤ顔をしている絵美に、

「痴漢はダメだろ!! 何、痴漢を推奨してんだ!! 女性の敵か!!--」

「実の母親にそんな事言わないでよ。悪気が合つたわけじゃないの」「いや、悪気しかねえーだろ!!」

バレた? と言つて、テヘッ と首を傾げた絵美。同時に最後の皿を拭き終え、ダイニングキッチンから、飛び跳ねるような足取りでこちらへやってくる。

「ちょっと、どいて」

海斗と琴無の間に絵美は無理矢理、割り入つた。四人掛けのソファは沈み込む。海斗は右によつて、背もたれに背中を預けた。

「ホント、琴無ちゃん。可愛いね」

「あ、その、ありがとうござります」

「母さん、それナンパみたいだぞ」

「だつて」ガツと琴無を抱き締めて、頬ずる絵美。

抱き締められた琴無は「あ、その。えつと」と何か呟いている。

「可愛いじやん！！」

なんだ、このぬいぐるみ感覚。俺も抱きついてみたい。そう思い

つつ海斗は、

「今無、嫌がつてるし、やめろつて」

「じゃあ、海斗も琴無ちゃんに抱きつくな？」

「え？」

彼には予想外の言葉を絵美は放つた。その後、琴無から離れて、ほらっと言つた。

「お、お」

変な声が出てしまつた。段々と顔もにやけてくる。妄想力が二次関数的に上向きに上がつてくるのだ。白い肌の感触や同世代の女の子の体温、甘く爽やかな女の子の香りと汗のすっぱい匂いが混ざつた香りが妄想だけで海斗の感覚神経を刺激した。黒髪のサラサラ感も同時に思い浮かぶ。脳内映像構成技術は思春期の男子が一番だと表している。

「その、アレだ。母さん」

海斗は顔を少し上げると、絵美の名状できない表情があつた。

「学校では違うよね？」

「い、いきなりなんだよ」

「気持ち悪いなあ～つて思つてさ。あの子、奈津実ちゃんにも同じ事やつてるの？」

「あ？ 狹山？ つか、同じ事つて、まだ何もやつてない」

「まだつて……」琴無がボソリと呟いた。

「言葉の綾だよ！！ 深い意味はないつて！！」

「深い意味はないつて事は、もしや……海斗」

「ちげえーよ！！ まだに意味はありません！！ 深い意味も浅い意味もありませんから！！ 一人ともなんで同じリアクション取つてんだよ！！ 以心伝心ですか！？」

「でも、今の海斗に対する反応は十人一色だと思うけど。母さんだつて、流石にさつきのは…………」

「不気味な余韻！！」

「なんか、海斗、必死だね」

絵美が数回、頷いた。納得するところなど、何一つ無いはずだ。
「俺のキャラクターがこの会話で、今無の脳内に刻まれるんだぞ！
！ 必死になるのは当然だる」

「あ～だから、必死なのね。琴無ちゃんに好かれようとして。
どう思う。私の息子は？」

お、おい。と海斗は言いかけたが、やっぱり可愛い女の子から見
た自分は気になるもので、口を止めた。

回答者である琴無は海斗を一瞥して、

「お節介」

「お節介？ まあ、海斗らしいって言えば、海斗らしいかも」

「なんで」

「いや、海斗ってお節介じやん。困つてる人がいたら、すぐに首突
っ込むし。だって、小学校の頃なんて、中学生とよく喧嘩してたよ」

「そりだっけ？」

全然、覚えていない。小学生の時は、純朴な可愛い少年だった氣
がする。

「そうだよ。よく、喧嘩してたじやん。その度、私が呼び出されて
る。ホント、やんちゃだつたのよ」

思い出を懐かしむかのように、絵美は呟いた。

「君つて、昔からだつたの？」

「そんなの知らん」

知らないものは知らない。よく、先生に怒られていたのは覚えて
いたが。

TVでは、巨悪が主人公の一撃に悲鳴を上げて、儚い消し炭にな
つていった。

「ああ、琴無さん？」

茫洋と続く海のような闇の一角落に、身を寄せ合ひビル群。屋上で肌を切るような寒冷な風が吹き通り、眼下には、星達が地面上に落ちたかのように住宅が光を灯していた。

その一際高いビルの屋上に彼は居た。

「加川は複数の魔術師を雇っているようです。まあ、雑魚ですけど。一応、警告したんですけどね。どうしても戦いたかったらしくって、戦闘狂ですよ」

彼は足で目の前に転がる物体をひっくり返す。それは人の形をしていた。そう。形は人間。しかし、それは黒い。黒く炭化してしまつているのだ。

「どうせ、『魔会』が絡んでるんでしょう。あの加川がこの事件の首魁なんですから。アーサー王の宝剣でも持ち出したかもされませんね。そうなつたら、少し面倒ですね」

焦げているのは、人間のような物体だけではなかった。屋上、貯水タンクや排気用のファン、落下防止のフェンスまでもが黒く汚れていた。

「でも、何故、一般人を襲うリスクを負つたんでしょうね。警察調べによると、被害者達に、『一般的な』共通点はないらしいですけど。まあ、『一般的な』ですけど」

彼の口調からは深刻さを微塵に感じられない。ただ、ＴＶ番組の内容を教えるような気軽さが漂っていた。

「ちょっと、怒らないでくださいよ。一般人が殺されて琴無さんがイライラしているのは分かりますけど、探索は僕の役目でしょ？ あんまり一般人が殺されてる事で反応してると、殺人鬼だと間違えられますよ？ 守らなければならぬ彼に。しかも、琴無さんは戦闘専門なのに体調が悪いでしょ？ なら、ちゃんとベットの上で休

んでください。あと

「

ふいに赤い光。それが大きな音を発生させながら、数台、地面を這っている。

「また、被害者出たみたいですよ。ホント、勇ましいことですね、
加川は」

行間（後書き）

次の掲載は、木曜日に行つ予定です。

朝から雨は降りそうだった。

昨日の晩から曇り始め、いまでは洋々と灰色の曇天が頭上に広がつていて。しかし、雨雲はほんの少し青み掛かっており、雲の層は厚くなさそうだ。今日一日はなんとか持ちこたえそうである。

山紙海斗は、新たな被害者が出た殺人鬼騒ぎで早帰りになつた授業日程を終えて、自宅への道を猛スピードで走っていた。それは勿論、琴無の頼みごとを叶えるためである。どんなメリットがあつて手伝うのかと問われたら、答える事は難しい。だが、強いて理由を見つけるとしたら、あの魔術師少女をほつとけないからであろう。恋愛感情や親心というよりは、なんとなく友情に近い感情が無視できないでいるのだ。

「ん？」

海斗の視界に、無数の電柱が突き立つ住宅街と、竜狩高校の女子一年生が映つた。その少女は背は低い。黒の長髪が腰辺りまで伸びているのも低く見える要因だろうが、そもそも身長が小学生のように低いようだ。そのせいか、学校規定より短いスカートの丈以外、可愛いと人気のセーラー服に着られている感がある。だが、首に巻かれたピンクのマフラーや大き目の茶色い手袋が、その着られてる感を一種の長所として変えていた。

（母さんか……）

海斗は一年生ではないことは一瞬で分かつた。それは、身長ではなく。何故か、両手に一本ずつ握るビニール傘、見覚えのあるマフラーからでもない。その、澄み切つた金色の目だ。

海斗は走るスピードを緩め、その一年生ではなくセーラー服を着用した琴無の前に至つた。そして、一度息を吸い込む。ここまで走ってきたせいで、すぐさま話せる状態ではない。

だが、琴無はそんな海斗をお構いなしに、「はい」とビニール傘

の一本をズイツと差し出した。

「ありがとう」海斗はそう言って受け取り、傘を杖の代わりにした。
「なんで、そんなに息切らしてるの？」

「いや、走ってきたから……だつて、3時に俺の家だろ？」

「ふ~ん。じゃあ、いきましょ」

感心なさげに相槌を打つて、琴無は前屈みになつている海斗の隣を過ぎていぐ。

「ま、待て……優しさの欠片を俺に恵んでくれ」

その声に反応した琴無は、「歩きながら休めば?」と自分が正しいと言わんばかりの顔をしながら、口にした。

「歩きながら、休むつてどうこう」とだ

「文字通り」

「まず、歩くの定義からおかしいですね……」

「マラソンでも疲れたら、歩くでしょ?」

「待て。おかしい。なんで、」

海斗は、グダッと重石を乗つけられたような身体を動かして、琴無に近付こうとしたが、彼女は一定の距離を保つためか、前へ進んだ。

彼は分かつた。

(避けられる……)

どう考へても、昨日のニヤニヤがいけなかつたのか。

テンションが上がつた為、顔が笑つてしまつただけなのだが、恐らく琴無からすれば「お、お風呂に入つている最中に……」と内心、そんな恐怖があるのだろう。そのせいか、妙に他人行儀で、一日過ごしていたはずの自分よりも母親の方に懐いている気がしていた。実際、海斗も高校一年生といつ性に対してやんちゃな時期ではあるからに、少しあやまちい気持ちはあつた。だから、ニヤニヤを全否定をする訳にはいかない訳で……。そもそも、妄想はした訳で。

太い溜め息を吐いた海斗。この先、琴無と行動してどうなつて行

くのかが不安だ。彼女以外の魔術師に会う前に、痴漢の冤罪でボコボコにされそうである。

「ほり、もつ」

いや、もう少し……、と言いかけで、海斗は自分の体力が回復しているのに気付いた。

「行きましょう」

駅前は、所謂、竜狩市の中心部だ。見回せば背の高いビルやスクランブル交差点。バス用の大きなロータリー。裏道にはカラオケ店やキャバクラ。ゲームセンターなどがある。少し匂いを嗅げば、料理の芳しい香りを感じられ、耳を澄ませば雑多な音の塊。ロックアレンジされたクリスマスの定番曲が流れている。不況など感じさせない賑やかな活気にあふれかえっている。

「いや、そのマジで」

この町、唯一のメイド喫茶、駅の西口を出て数分歩いたところ。キャバクラやカラオケ店が面する通りにある『コートピア』。そこ の店員（自称売り上げ貢献率NO・1）が胸の谷間を強調するサンタのコスプレをして、恋愛事に關して奥手の海斗に迫っていた。メイド喫茶なのに、サンタって……とは、そこまで海斗の頭は回つていなかつた。それは、一の腕辺りに肉厚だが、柔らか味がある嬉しい感覺、また大人の色香がムンムンと彼の鼻腔を刺激するからだつた。一、男性としては幸福感に包まれているが、人間としてはひとつとと前へ進みたい。そんなパラドックスが彼を悩ませていたのだ。助けを求めるつもりで海斗はチラッと琴無の方を一瞥すると、いない。

（なんだ、こんなタイミングで！－！）

探す為に首をふつていると、ある薬局。メイド喫茶『コートピア』の対面にある雑貨が溢れ返つていてる薬局に入つていく後姿が目に入

つた。

「ねえう。『ご主人様あ』

視線を戻すと、化粧を塗りたくつた顔がそこにある。瞳はまるでパンダ。だが、目がトロンとしており、年上のエロティックさを放っている。メイド喫茶というより、もう少しいかがわしい店に勤めてるのではないかと疑ってしまう。

(ヤバイ)

こういう時は視線を合わせてはいけない!! どつかの本に書いてあった。という嘘か本当か分からぬ情報を信じて、海斗は顔を背けた。

しかし、執拗なお色気攻撃が海斗を襲う。傍から見たら、どう見たとしても馬鹿一人なのだが、当事者の彼からすれば、一種の聖戦ジハードなのだ。

「えっと、あの。俺、」

「私、」

「その、」

「ご主人様がいないと、私

ギュウと更に二の腕が、男の浪漫が詰まつた二つの實に圧迫される。しかも、メイドの左手がポケットの中にゅっくりと入つていた。人間の生身（手だけ）の温かさが冷えた太腿を常温に戻そうとする。

(もう、無理)

ああ、流されよ。もう、流されよ。と海斗は空を見上げた。

生憎の曇り空、しかも右手にビニール傘を握つているように雨が降るかもしれない曇りたが、海斗の心は清々しい気持ちでいっぱいだつた。誰かに諦めも重要だということを教えてあげたい。地球は青いことも同時に教えてあげたい。

ポケットに入つていた手がモゾモゾと動

「何してるの?」

視線を元に戻す。そこには救世主。メシア。そんな感じに神々し

さを放つていいように見える琴無が居た。まあ、ピンクのマフラーに口元を埋めて、あからさまに不満そつだが。

「い、今無……」

「チッ……」海斗は突き放される。「リア充かよ。ホント、見た目はダメダメそうなのに。人間は外見じや分からないつてこと?」転びそうになるのを足を踏ん張つて、堪え、振り返ると、腕を組んで眉間に皺を寄せる自称NO・1。先ほどと別人のような、凶暴な雰囲気を放つている。発情期の猫のような声が嘘みたいだ。

「そんな可愛い子を連れて。…………私なんて、キモオタどもの相手。というか、死ね!!」

ふんっと踵を返す自称NO・1。そして、新たな獲物をロツクオシしたようで、見覚えのある見覚えのある爽やかボーイの腕を掴みに行つた。

「な、なんだコレ」

呆然とする海斗。

不満そうに彼を見つめる琴無。

その一人をコソコソと話の種にするおば様方。あと、他学校の生徒。

ドロドロよ。ドロドロの三角関係よ。といつ声に海斗はフツと我に返り、

「い、今無。何コレ」

「さあ?」首を傾げるだけの琴無。

「えっと、その、行くか」

「そうね」ガガガガ、と琴無はビニール傘を引きずりながら、歩き出した。

(そんなに俺が色仕掛けをかけられるのが嫌だつたのか?)

そうにしか見えない琴無の態度。先端が削れるので、ビニール傘を引きずるのは先端が削れるのでやめて欲しいとは言えない。

「な、なあ、今無」海斗は琴無のすぐ左に付き、「その、なんか怒つてないか?」

自分で言つておいて、なんか質問の内容が馬鹿っぽいなと海斗は思つた。

合図なしに立ち止まつ、琴無は不機嫌そうに結んでいた唇を少し開いて、

「アイス」

「ん？」

疑問を表した海斗を責め立てるよつこ、

「アイスが売つてなかつたの。なんで、バニラのカップが売つてないの？ チョコレートじやなくて、抹茶じやなくて、なんでバニラが売つてないの？」

「ん？」

更に海斗へ一步踏み込んで、

「だから、アイス。薬局でジュースとかお菓子が売つてゐるのに、なんでバニラのアイスがないの？ おかしいよね？ なんで、アイスに反旗翻してゐるの？」

「その、お前つて、アイスフリークつてことを言いたいのか？」

「クン、と琴無は頷いた。

「今は12月だぞ。しかも、もう少しでクリスマスだぞ？ 是が非でも売りたいところなんてないだろ」

「でも、私みたいな消費者もいるんだよ？ なんで、予定調和的にないの？ 罫にはまつたみたいな気分。ここまで来る時もお店に寄つてみたけど、なかつたし。ホント、罫にはまつたみたい」

何故、最初から機嫌が悪かつたのか。その理由が判明した。

「までまで、罫にはまつたつて。自分で墓穴掘つただけだろ？」

「じゃあ、君は欲しいエロ本が売つてなかつたら、どうするの？」

「いや、なんで、エロ本を例えに出した？ つつか、大和撫子の恥じらいは！？」

「でも、絵美ちゃんが」

「絵美ちゃん？」

そう、絵美ちゃん、と琴無は、海斗の間に瞬時に言葉を返した。

恐らうだが、自分の母親がそう呼ばせたのだろう。いい歳こいて。

少し残念な母親だと海斗は思つたが、今はそんな話ではない。

「絵美ちゃんが、君は変態だつて。コスプレで、メイドとかナース。あと、日曜の8時にやつてている小学5年生が主人公の魔法少女物で

」

「 ちよおおお！！ お前は何を言つている！！ 馬鹿なの
か！！ 大体、なんでそんな俺の性癖（仮）を暗記してるんだよ！
！ 何、俺の為に頑張つちゃう願望みたいなものあるの？」

「 暗記は得意なのよ。私」

「 そこじゃない！！ 俺だつて、気になる女子の好きな歌手ぐら
い一回聞いただけで覚えられます！！」

初恋の女の子に居たつては、筆箱の中身まで熟知していたのだ。
別段、誇る事ではないが。

「 でも、絵美ちゃんが言えつて言つたから言つたのよ」

「 おい、鵜呑みにするな。つつか、『小学5年生が主人公の魔法少
女・エクス真希』の後、なんて言おうとしたんだ？」

「 エクス真希？」

墓穴を掘つた、ではなく掘りかけた海斗は、

「 あ、いや、魔法少女物の後」

「 それは、えつと」

嘘を吐く時や言い難い言葉を発する際は、人間の目は泳ぐらしい。
琴無の金色の目は左斜め上を向いている。

（これは…………好機！！）

「 言えないのか？ なあ、言えないのか？」

「 い、言えるわよ

「 ジゃあ、言つてみなさい。この、山紙仙人に言つて御覧なさい

「 その…………せつ、」

「 ほほう。言えないのか。魔術師でもあるひお方が。私にその単語
を言えんと申すか！！」

カツと一重の瞳を見開いた海斗。内心、俺つて馬鹿だなあ～とは

思つてゐるが、もう乗つてしまひた船。引き返す訳にもいくまい。

うとしている単語を使ってな。はつはつはつはつはつはつ

おば様方のゲテモノを見守る視線や、客引きのアルバイトの哀れみに近い眼差しが異様に身体へ突き刺さる。ズブリ、ズブリ、と表皮を貫通して、心にも刺さっていた。

極め点けにコレだ。

「...」

琴無の有無を言わせない目つき。

「えっと、その。行きまし

「別に。君がそう詮うなら、
琴無は不機嫌も更に進んだ。海斗は、ものすゞしい罪悪感に襲わ
れる。

そして、歩き出した琴無の後を、様子を伺しながら追う海斗。まるで、腰がんばりくだ。

「少し、魔術、加川について話しておく」とぶつせり棒に咳いた。
「先ずは魔術の話から。…………魔術というのは神話から魔術的情報、意味を抽出して出来ている。それはこないだ、君に言つたと思う。でも、君の左腕は誰にも気づかれてないよね？」

唐突な事に海斗は「あ、ああ」と矢継ぎ早に頷いた。

「それっておかしいとは思わない？」
「いや、俺の左腕が本当に魔術によつてなのか？　もし、この左腕
かるのに、君の左腕が分からぬなんて。それはおかしいよね？」

が

数回、左拳を開いたり握ったり。調子を確かめるように海斗は琴無に左腕を見せた。

「琴無はそれを一瞥するだけで、
「多分」

「じゃあ、俺の左腕が神話に出てきるものなのか？」

「それは分からないわ」

「なんだ？ 魔術は神話から出来てるって。今無の魔術だつて、

神話のものじや？」

違う、と琴無は言い、

「魔術は神話から抽出した魔術的意味から出来ているの。だから、その左腕が何の神話から生まれたのかは分からない。今、存在する現代魔術の傾向は、ある神話の魔術に存在する弱点を減らして、オールマイティーに、そしてその魔術を使うことなの。まあ、自分自身が使ってる魔術ぐらいはどんな魔術が元に成ってるのかは、『私は理解してるけどね

「つことは、俺の左腕は」

「多方面からの神話的な要素を組み込んで過不足ないような魔術を作り出す。そうすると、何が元の神話なのかは分からないでしょ？」「絵の具で色を作った後みたいな感じか…………」

意味は分かつた。

しかし、そう説明されても海斗にはイメージが、映像化が出来なかつた。どういう感覚で発動して、どういう感覚で魔術を扱うのか。また、どうしても彼の頭には力学的エネルギーの保存などが頭に浮かんで、魔術についての理解が深まらない。自分の左腕と長く付き合つていてもだ。

「でも、俺の左腕が結局、よく分からんんだけど？ だって、コンクリートを碎けても、あの兩合羽の一撃を受け止めるような力は今までなかつたし」

「本当になかつたの？ 本当はそこまでの力があつたんじゃないの？」

海斗は首を振つて、否定した。

しかし、彼には否定する為の歴とした理由はない。ただ漠然した裏づけのない確信があるだけだった。

「じゃあ、魔術にでも反応する左腕なのかも…………。でも、外的

「変化がない」

「そういえば、その外的変化ってなんだ？　ずっと、気になつてたけど」

外的变化。字面だけ見れば、外に現れる変化。だが、それは一般人の定義だ。確信はないが、魔術側では違うだろう。

琴無は斜め上に顔を上げて、海斗の眼をジッと見つめた。初めて会ったときの威圧感はないが、その代わりに、

(…………確かに妹にしたいな。コレは)

体感で表したら一分程度。実際は二十秒もないだろう。

「私のことを見て、おかしいと思わない

「おかしいこと？」

そんな質問をしてくるのがおかしい、とは思つたものも、そういう事を言いたいのではないのだろう。ま

「いや、特に？」

「本当に？」

「ああ、本当に」

「私の目つて、おかしいと思わない。色的に？」

「あ、いや、まあ。確かに」

普通ではありえない金色。確かにおかしい。

「これが外的変化。ある一定の能力持ちが、『生まれつき』持つ罰みたいなものよ」

「生まれつき？」

「そう。しかも、魔術的要素を含むから、一般人には指摘され難い」

一般人には気付かれ難い。それならば、

「んじや、俺の茶髪と一緒にだな」

「茶髪？　染めたんじやないの？」

「いや、多分、違う。気が付いたら、茶髪だったし。しかも、誰にも指摘された事はない」

実際、髪染め禁止のはずの中学校や高校で、指摘を受けたことはない。だから、黒髪に染めようとも思わなかつた。

「じゃあ、その左腕は魔術に反応する能力なのかもしない」

海斗は謎の左腕を見つめる。

「でも、決して戦わないでね？ 命を懸けて戦うなんて、馬鹿がすることよ」

「そつか」

「この一日で、何回見ただろうか？ やはり、急激に加速する自分の物語と、この独楽の軸はこの左腕だ。」

隣で発せられた琴無の「話戻すわ」という声に海斗は顔を上げる。「何で神話^{モチ}が認知されているのに、魔術は認知されないのか？」

「ああ」

「それは人間の常識観念によつてなの。もし、あの人」

「あ？」

前方で変な掛け声と共に腰を回している、割烹着を着たラーメン屋の女店長らしき女性を琴無は顎で指した。

「あの人気が、実は空を飛べるって言われたら『普通の人』は信じられる？」

あの人気が空を飛べる？

天使の羽根でも生えるのであろうか？ あの少し汚れた割烹着を突き破つて、純白の翼が羽ばたき、まるで天使のように……。需要があるかどうかは不明だが、とにかく。

(そんな深い意味じゃないよな)

海斗はうーんと唸つて、考える間を取つてから、

「魔術師と話してる今なら信じられるけど、普通は信じないだろ」

「それが人間の常識観念なの。君みたいな能力者からしたら、魔術の存在について容認が出来る。だけど、魔術に触れ合つたことが無い人からしたら、魔術を聞いても、見ても絶対嘘だと勘繰るでしょ？ そして、ほとんどの人間は嘘 神話だと決め付ける。英語で『mythic』という日本語では、『神話』と『架空』を意味する形容詞があるのが証拠ね」

「でも、じゃあ、なんで神話は認識できるんだ？」

「完全な嘘だれというのが『真』だと人間の認識により思われるからよ。一般人も神話が嘘じやないなんてことを疑わないのよ」

そう言つてから、もう分かるでしょ？」と琴無は最後に付け加えた。

昨日の話、認識による魔術の話からすると、神話は偽者が本物だと思われているから本物。なので、現に現れた魔術を魔術としての新しい枠組みではなく、その嘘が真だと思われている神話のカテゴリーに入ってしまうということなのだろう。

「纏めれば、魔術は気付かれないって事か？」

「いいえ。魔術は気付かれ難い。気付かれなかつたら、誰も魔術なんて使つてない」

それは、そうか。と海斗は独り言のように呟いた。もし、魔術が気付かれないものだとしたら、自分の左腕で人を傷付けても罪悪感がないまま終わってしまう。

「ここまでが魔術の話。というよりも、前置きね。次からが本題。あの魔術師、『加川』についての話」

黒き犬

「『』までが魔術の話。というよりも、前置きね。次からが本題。あの魔術師、『加川』についての話」

ふと、目が合つてしまつた天使の女店主（仮）に一応、軽く頭を下げて、海斗は言葉を返す。

「加川？ あの雨合羽の名前か？」

「そう。名前は分からぬけど、加川と呼ばれてるわ。まあ、コーデネームみたいなものだと考えていいわ」

「じゃあ、前置き、つーことは、本題は？」

それはこれから話す、と琴無はすばやく答える。

「君は今起こつてゐる殺人事件は、加川のせいだとなんとなく分かつてゐるでしょ？」

「あ、まあ。漫画とかだと、そつだよな」

「じゃあ、仮にこの町の殺人鬼が加川として、何で人を殺す必要があると思う？」

かなり物騒なことを口にした琴無。しかし、一々そこを突つ込んでいても話が前へ進まないと判断した海斗は、その事について思考する。

（殺す理由か……）

少なくとも、TVで見る限りでは殺害された被害者同士では繫がりはなく、怨恨目的はによつた。なら、憂さ晴らしに人を殺しているのだろうか？

（そう考へてもおかしい。憂さ晴らしなら、魔術師が……今無が居る地域で何回もやるわけねえよな？）

海斗は視線を上げた。

雑多な声や足音、BGMがこの場を盛り上げてはいるが、アイスの外面が溶けたような赤い夕日がビルとビルの隙間から差込み、哀愁を宙に漂わせていた。年の暮れだということも起因しているだろう。

店先に出されたいくつものクリスマスツリーは濃い緑色の葉を付けている。これで、巡回する警察官が居なければ、いつもと変わらない風景である。

そういうえば、と海斗は、犯行現場はは暗い一面を覗かせる場所。また、被害者は女性。と思い出した。

「強姦目的か？」

かなり真剣に答えたつもりだった。しかし、琴無の顔に満足そうなものは浮かばない。それよりも、どこかががっかりしたものがある。

「もし強姦目的として、なんで殺したの？」

「いや、それはアレだ。抵抗したから」

「なら、亡くなつた人はなんでそのままなのよ。普通、足取りを隠すためにどうにかしない？」

「それはそうだけど」

「しかも、魔術は一般人には気付かれ難い攻撃方法なのよ？ でも、加川はわざと気付かれるように魔術で殺害している。魔術師のルールを破つてまでもね」

魔術師のルールとは、恐らく、琴無が連呼していた一般人に対する干渉。彼女がここまで言うのだから、魔術師にとつて相当大切なルールなのだろう。

（つつことは怨恨か……。別れ話とかの縛れで）

海斗はそう思つたことを言おうとしたが、

（魔術師が恋愛なんかするのか？）

視軸を隣を歩く魔術師に合わせる。

一言で言えば、可愛い。

海斗が見てきた中でも、高校内で軽いアイドル化が進んでいる狭山奈津実を差し置いて、ずば抜けて可愛い。恋愛ゲームの内側から、気まぐれに飛び出てきたように完璧な容姿だ。

俯瞰してみれば、道を歩く人たちから注目を浴びている氣もある。もしかしたら、あの女店主は自分『達』ではなく、琴無『一人』を見たのかもしれない。

しかし、可愛さが過ぎるためか、極限まで洗練されて、男を寄せ付けないオーラを放っていた。

親しみ易さ、そこだけを注視するなら、確実に奈津実に軍配が上がりつている。

(魔術師で恋愛はねえーよな…………)

そもそも、あの雨合羽が手を繋いで、誰かと歩くとは考え難い。

「じつと見てどうしたの？」

「あ、いや、なんでもない。つつか、分からぬ。俺の貪相な脳みそじゃここまでだよ」

「そう」海斗から視線を外して、琴無は歩を進めた。

「そうつて。結局、なんでその……加川は殺しをやってんだ？」

「知らない。だから、君に聞いたの。そもそも、分かつてたらこの町を歩き周つてないわ」

「ん？　じゃあ、竜狩市の観光で歩いてる訳じゃないのか？」

まるで馬鹿を見るような憐憫の含んだ瞳で琴無は彼を見た。

「いや、そうだよな。うん。俺が悪かった。うん」

これから向かう場所は、殺人現場の一つ。観光で行く訳もない。行く事は、今日の朝に唐突に言い渡された。何故、行くのかは分からぬ。というか、彼が寝坊した為、聞けなかつた方が正しい。では、

「なんで殺人現場に行くんだ？」

「それは」

彼女はビルとビルの狭間にに入る。そこには多くの自転車が並んでおり、一種の駐輪場に変わっているようだつた。排気用にファンが唸りを上げている。

「魔術的意味を探すからよ」

粗雑に並べられた自転車を琴無は器用に避けながら、前へ進む。一方の海斗は、「うおッ！」と倒してしまつた自転車を大急ぎで立て直し、

「ど、どういう意味だ？」

「魔術の手順は、魔術的意味を表す行動、図を表現して、それに魔力を注ぎ込むって言つたよね？」

「ああ。ゲームとかの魔法陣みたいなものだろ？」

「ええ。なら、その魔法陣を書くには何かしらの用紙が必要なのよ」

「そこで琴無は一区切りをした。そして、息を吸う。

「じゃあ、この町 자체を大きな魔法陣の『用紙』として見なしたら？ この町の至るところに殺人という魔術的要因を『わざと』残して、大きな魔法陣を描く」

この先は袋小路なのだ。普通であつたら、行つても意味を成さない。何も無いのだから。

「私の魔術も所謂、魔法陣を描いたりして発動をするわ。でも、私は、かなり簡略的だけどね。もし、魔法陣とやらの例を挙げるなら、安倍清明の清明桔梗印とか、それを逆さまにしたような形のデビルスター。あと、ウイッチクラフト系の魔法円。それと、生命の樹の球や小径ね」

「じゃあ。もし、その巨大な魔術が発動されたら？」

「さあ？ 日本を潰す気じやない。でも、その図次第だけどね」

「潰す？」

「ええ、潰す。一般人に殺人を分からせているあたりから、一般人にも関係する魔術だと思うけど」

海斗の背筋にゾクリと悪寒のようなものが駆け抜けた。

魔術についてはあまり分からぬ。琴無が自分に話してくれたことも、魔術のほんの一部であろう。しかし、魔術の規模は魔法陣の規模に比例する。そんな事は、なんとなくだが予想は出来た。例えば、手榴弾よりも弾道ミサイルの方が、はるかに火力を有しているように、説明を聞かずとも見当がつく。

(この町全体を魔法陣にするつて……)

しかし、海斗の心情に反して彼女は軽口を叩くような言い草だった。あまりにも簡単で感心がない。まるで、実現不可能な絵空事について話しているかのような、そんな印象がある。

そんな態度の琴無に、海斗は軽い怒りを覚えたが、それは間違った怒りだと彼は自分自身で認識していた。魔術師に対して、部外者が口出しをするのは甚だおかしいからだ。

「でも、普通の魔術師ではそんな大規模な魔術を発動できない。魔力の伝達率は電荷の電位のようなもので距離に反比例するのよ。もし、この町全体に伝達できるような魔力伝達技術があるなら、私だったら世界征服でもする」

「じゃあ

海斗は言葉を紡ぎうとしたことを遮るよつて、元気めの話

「発動できない訳じゃない。普通の魔術師なら出来ないのよ。でも、普通の『魔術師達』なら出来てしまう。ちゃんとした場所配置で寸分の狂いなく詠唱できればの話だけだ」

「待てよ。もしかして、」

その言い方だと、この町に潜む魔術師はあの足狩と呼ばれる魔術師を合わせて三人、だけではないと言つていいようだった。

袋小路に到達。いや、正確に言えば袋小路前。KEEP OUTと描かれた黄色い立ち入り禁止のテープが袋小路を寸断するように張られている。まるで、むせ返るような臭いを放つ猛獸を押さえつけれる檻のように。

「ええ。私達のほかに魔術師は居るわ。しかも、全て敵側でね」「琴無の手袋を嵌めた指が、黄色のポリエチレン製のテープに掛かる。そして、引っ張り、巻き取った。

なんだよ、もう。

海斗はゲームセンター入り口にある自販機、その横に据えられた赤いベンチに腰を下ろしていた。右手には温かいコーヒーを持って、重い事情を背負い込んだサラリーマンのよつて前傾姿勢を取っていた。

空けられた口から、白い湯気が昇る。

それを吹き消す海斗の溜め息がスチール缶に当たった。

(くつそ。話がでか過ぎだ)

日本を潰す？

一般人だったら現実味を感じないだろう。しかし、海斗には眼前に巨大すぎる壁が現れたかのように思えた。この戦いの当事者ではないとしても、戦わないという条約を琴無と結んだとしても自分の行動は、一応この戦いに影響を及ぼすだろう。もし自分が何か見落とし、それが重要な事であるのなら、日本の終焉が訪れる。しかし、まだ全てが仮定だ。それでだけが、唯一の救い。

ふと、海斗は顔を上げた。

視線の先には闇に染まるビルとビルの狭間。もう夜。街灯がない袋小路は暗いのは、当然である。だが、そこ的一点に光が灯っていた。それは恐らく琴無の携帯の光だ。懐中電灯の代わりとして、携帯の光を用いたのである。海斗は思うには、魔術的要因を探すのに手間が掛かっているのだろう。

まあ、俺は、分からぬからここに居るんだけどね。とも自嘲気味に思った。

「はあ、」

海斗はベンチに寄りかかった。そして、空を見上げた。

いつもなら、夕飯の献立を考えている時間だ。無論、母親の帰りが遅く、自分で作らないとならないからだ。何をどうしたら、日本存亡の危機を一介の高校生を考えるのだろうか。

あと数日でクリスマス。サンタクロースは酷いものをプレゼントをしてくれたようだ。

ワクワクという名の綺麗な包み紙の中には、巨大な重圧の責任が隠されていたのである。

「何、やつてんだろ。俺」

左腕へ視線の焦点を変更する。

この左腕のせいで、この戦いに巻き込まれたのか？

もしくは、お人よしな感情が彼女を助けたかったのか？自分が琴無の足枷になつてゐる気がして仕方がない。

彼はギュッと拳を握つた。

そんなタイミングだつた。

学生ズボンのポケットに入つてゐる携帯がブブブ、と振動を起こした。

母さんか？ と当たりをつけながら、ポケットから携帯を取り出すと、

画面には『栗木英士』の文字。

(なんで、このタイミングで)

彼は自身のロック番号。3445と文字盤に打ち込み、メールボックス欄を開き、栗木からのメールを選択する。

どうやら、画像が添付してゐるようである。海斗は面倒ながらも下へスクロールする。

『メイド喫茶つて一番ベターな喫茶店だ！！

いやでも、お金つて無意味だよね。愛の前には。

ホント、あの巨乳サンタにやんと、にやんにやんしたかつたぜ！..』

その文章の下に栗木と、あのNO・1とは違つメイドさんがピースしている画像があつた。

どうやら、NO・1に勧誘された爽やかボーイは栗木英士君だつたらし。

あと、一番ベターつて。結局、どつちなんだ。

海斗は街灯に照らされる道に沿つて、そのメイド喫茶『コートピア』に視線を向けた。外観は場に合わないアンティーク風。営業は続いているらしく、メイドさんと客が楽しそうに談笑してゐるように見えた。いや、実際のところは、動いているのも分からぬ。ただ、影が見えるだけだ。この辺り、田が悪くなつてゐるなど軽い実感を受けながら、海斗はコーヒーを啜る。

(ゲームのやりすぎか？いや、勉強のやりすぎだよな)

風景を眺めていると、なんとなく暗い気持ちが紛れることに気付いた海斗は周りを見回す。

多くの店がひしめき合う光景はやはり賑やかさがある。クリスマスという一大イベントもあってか、外装の派手さが目に入ってくる。まるで、そう祭りのようだ。まあ、人が

「あれ？」

海斗は「コーヒー」一度飲み、道の中央に出る。

「人が」

後ろを見る。

「人がいない」

まるであるの時と同じように人が居ない。すっぽりと抜け落ちたようにこの道を歩いている者が存在しない。何故、先ほどまで気が付かなかつたのか？夜の出入りが激しいはずのゲームセンターには誰一人として入店していないのではないか。

咄嗟に海斗は袋小路の方に顔を向けた。そこにはポツンと一点の光がある。

それは琴無の携帯の光。

のはずだ。

「なんでだよ」

そもそも、琴無が光を用いるなら、魔術を使うのでは？

疑問が浮かぶ。

海斗はその疑問を解消するため、足を。

視界の端で何かが動いた。

顔を右に。

そこには走るメイド服の少女。そして、その少女を追う黒い犬。その一つが裏路地に消えた。黒い犬に見覚えはある。いや、鮮明に、まるで海馬に刻印されたかのように覚えているのだ。

「 ッ！…」

体は動いていた。

しかし、戦つてはいけない。そんな戒めにより出遅れた思考。
(分かつてゐる。分かつてゐるけど…)

パブロフの犬にも似た、条件反射の正義感があるのだ。もひ、それでいい。

思考が行動に追いつく。

そして、彼は飲みかけのコーヒーを投げ捨て、走つた。
しかし、彼はメイドの少女が消えた路地裏には向かわない。理由は簡単。追つても間に合わないと踏んだからである。
なら、最短ルートを突つ走るしかない。

この童狩市の道は異常に入り組みあつてゐる。ちゃんと区画整備をやつたのか疑いたくなるほどだ。そのせいで事件的な死角が多い。
恐らくだが、初めての観光客は迷路と形容するだらう。

海斗は右足でブレーキをかけて、一つの路地に入る。
その路地は他の路地に比べて広い。しかし、生ゴミや下水の臭いで酷く、圧倒的に交通量は少ない。少し前であつたら、カラスや野良犬の溜まり場とし有名だ。

「 間に合え…！」

青いゴミ箱や黒い猫を避けながら、猛然と進む。この先に十字の合流地点があるのであるのだ。あの少女が曲がらずに走つていれば、ぶつかる。ベンチに鞄を置いてきた事が過ぎつたが、それは後々考えよう。

とにかく走る…！

海斗の前方に十字路。大通りに出られる。

(もう少しだ…！)

一段、スピードを上げた。長めの茶色い前髪が目にかかる。
左腕で前髪を退かした次のタイミング。

(ビンゴ…！)

黒と白の一色で構成されたメイド服の少女が過ぎ
んづけたように少女は転んだ。

何かを踏

「マジかよ！！」

海斗は拳を握り、地面を蹴る。

「くそ犬！！」

眼前に犬が飛び出た。それは少女を食らい殺す為。
両顎をいっぱいに開いて、少女を

ゴン！という金属音。手の甲から右肩にかけて、振動が走った。
(硬てえ！！)

しかし、力を込めた海斗の左拳が犬の頭に減り込む。そして、減り
込んだ頭部を基点とした錐揉み回転で真っ直ぐ吹き飛んだ。涎に似
た粘着性のある透明な液体が宙に舞う。黒き犬は地面にワンバウン
ドし、空き駐車場の緑色のフェンスに衝突。

「間に……合つた」

ギリギリで間に合つた海斗。息を何とか落ち着かせ、おびえている
少女に右手を向ける。しかし、メイド服の少女は執拗に首を横に振
つた。まるで化物の誘いを断つているかのように。

チクリと、刺されたかのように胸が痛む。

(これが魔術か)

一般人から見て、理解が出来ない代物。

「危ない！！

「え？」

海斗は向き直ると、黒き犬。口を広げて、今にも自分に噛み付こう
としていた。

咄嗟に左腕を盾に。

「 ッ！！」

突き抜けるような痛みが走り、海斗は後ろへ倒れこむ。後頭部への
衝撃に一瞬、気を失いそうになるが、歯を食いしばりなんとか耐え
た。

夜の曇天をバックに黒い犬は腕を咥えたまま、彼の上に乗つている。
首を左右に振り、食らい千切ろうとしていた。彼の視界には少女の
恐怖に満ちた顔も映つている。

左腕に血の筋が伝づ。犬の白い息づかいが鼓膜を叩く。

海斗は拳を握り、

「いてえ！－」

腕を振るつた。噛み付いていた犬は遠心力により、飛ぶ。そして、路上に不法駐車されている自転車の中へ突っ込んだ。

海斗はすばやく立ち上がり、体勢を立て直す。

犬はまだくたばっていらないらしく、銀色の自転車を踏みつけ、ゆっくりと立ち上がった。薄黒い涎が口から垂れている。先ほどの涎は透明。ということは、この犬達の血。あの黒い液体が唾液に混ざつたのだ。ならば、ダメージは与えている。

しかし、

（勝てるのかよ。『イイツ』に）

あの時、雨合羽の一撃を受け止めたようには上手く行かなかつた。何故、あの時はあのような逸脱した力が出たのか分からぬ。何故、今回は『いつも』通りなんだ。特別な力があるのではないのか。

（魔術に対しても反応してゐるわけじゃないのかよ）

ともかく、黒い犬を匕うにかして、倒さなければならぬ。

「でも、どうすんだよ」

海斗の視線の先には、威嚇するように喉を鳴らす黒い犬。先ほどの一撃には堪えていないらしい。どんよりと濁つたその眼は彼を違わず射る。

周りを瞬時に見回す。しかし、武器になりそうな物はない。この腕、一本で戦わないといけないのだ。

意を決め、海斗は左拳を握つた。もう、戦うしかない。

そう思つた瞬間。

ボコッ、と犬の背中が膨れる。まるで煮えたぎつた湯水の気泡のように、ドーム状。巨大な水膨れにも見える。そして、鳥の雛が殻を内側から碎くと同様に、あの『黒い腕』がその水膨れを突き破つて出現した。それは不恰好すぎる犬は姿。

犬の荒い息が止まる。

そして、犬は駆ける。

(くつそ！！)

咄嗟に、右へ跳ぶ海斗。犬の猪突をギリギリによけ、顔を左に。そこには刃が連なる頸^{アギト}。反射的に左腕を右から左へ裏拳を放つた。拳を犬の顔面に叩き入れ、殴り飛ばす。

が、

黒き犬は、生えた腕をアスファルトに這わせ、ブレーーキ代わりにアスファルトの地面が指の軌跡を追つて捲り上がる。

そして、再びの突進。しかし、海斗は反作用によつて、体勢^{ま勢}が儘ならない。眼前に、飛び上がつた犬。生えた腕は拳を握つている。

(ふざけんな！！)

黒き拳に合わせるように、目を瞑り左腕を自分の前方へ構える。そして、左腕からの衝撃が身体を突き抜けた。

海斗は自身が宙に浮いている事に気付く。だが、対処の手段を実行する間も無く、地面に身体を強く打つ。

「カツ……」肺から空気が漏れ出た。圧迫されて、息を吸うことさえ出来なくなる。

しかし、犬は止まる訳もなかつた。ただ獲物の命を食らひつ為、威を放つのだ。

無理矢理、上半身を起き上がらせ、海斗は全てを諦めた。

もう、犬が自身の攻撃範囲に到達している。拳がもう目の前だ。何をやつても、自分の頭がトマトみたいに脳髄を噴出して、死ぬ。

犬の拳が　　弾けるような音と共に視界が白に覆われる。

いや、これは手の色だ。海斗はそう思った。

「戦う理由なんてあるの？」

少女の聲音。あの魔術師の声が上から降りかかる。

白い視界が外されると、黒い犬が夜空を飛んでいた。恐らく、その白い手によつて投げ飛ばされたのだろう。黒い犬は重力により地面に身を叩き、「キヤンッ！」と高めの悲鳴をあげて、尻尾を巻いて逃げ去つてしまつた。

「今……無？」

彼が顔を上げた先には、桃色のマフラーをした黒髪の少女は立っていた。金色の瞳に冷たい光を宿して、彼を見ていた。海斗は咄嗟に立ち上がる。色々と不満があるので。

「ど、どこに行つてたんだよ！！俺、死に掛けたんだぞ！！お前が助けるつて！！」

パチン、と乾いた音が鼓膜を揺らした。

「なんで、戦ったの？」

その音がビンタの音だと気付いたのは、少し後だった。
そして、痛みを感じた。

ホース

海斗は不服だが、「一応、戦つて悪い」と頭を下げた。しかし、琴無の機嫌は直らなかつた。何を言おうと、ブスッとしたままで、海斗の言葉には耳を貸さなかつたのだ。

すると、海斗も海斗で何故、自分が悪者になつているのかが疑問になつた。実際、悪い事はやつて無い筈だ。だつて、メイド服の少女を助けるために戦つたのだ。なんで、俺が。

そして、海斗もふてくされて、琴無との会話を諦めた。

「…………、」

彼ら、海斗と琴無が居るのは山紙家のリビング。座つているのは、あの木製の食卓だ。昨日の人数から一人、絵美が減つている事になる。しかし、昨晩のような夕飯は、そもそも料理自体並んでいない。無論、帰りが遅い絵美の代わりに海斗が用意をしていないからである。

海斗は対面に座る琴無を気にしながらも、TV画面に目を向けた。

『　これで被害者は四人目ですね』

ニユースでは、おば様方に人気の男性キャスターが、この町を騒がす連続殺人事件（とは言つても、トップニユースではないが）について、機械的に述べている。

（どうせ、犯人は捕まらないつーの。くつそ）

犯人はどんなに警察や刑事達が頑張つても、「一般人」が正体を知ることが出来ない魔術師なのだ。しかも、挑発的な態度で、殺しをやつてのけている。

自分では捕まえられない。

そう分かつていつても、海斗には強い怒りはある。

誰か（たにん）をまるで人形のように壊して、奪い去つた肢体で新しいものを作り出す。

どうにかして思いつきりぶん殴りたい。だが、もし、目の前に現

れても、歴然とした力の差で不可能だ。

海斗は横目でチラッと琴無を見る。彼女も、TVに集中しているようでこちらの視線は気付いていなかった。

彼女も同様に荒立つてているのだろう。

だが、それは本当に人間としての怒りなのか、海斗は疑いたくなつた。もしかしたら、魔術師の誇りが彼女の心情に怒りを与えているのではないだろうか？ そうでなければ、なんで戦つたなんて聞くわけもない。もし、自分が助けなければ、あのメイド服の少女は死んでいたのだ。

（大体、本当にコイツがいい奴なのか？）

海斗はそれさえ疑つた。

漫画などでは少女が正義という定義が成り立つてゐる。しかし、それを現実に持ち出したら、違う可能性だつてある。本当は、彼女が殺人事件の犯人で、あの雨合羽が正義の魔術師。では、自分は悪い味方だ。そう仮定すれば、殺害された者は全て魔術師だつたと考えればいい。

いや、と海斗は自分に首を振つた。

特に否定的な理由はないが、やはり彼には少女が正義にしか見えない。

琴無が自身の為に、魔術を使つてゐるよつては考え難くかつた。

『被害者はどうやら、学生のようですが』

海斗は、耳に入ってきた「学生」という単語に反応し、TVに注目をした。

TVには無論、あのキャスター。そして、自信満々な面持ちの犯罪心理学教授と映つてゐる。

『しかも、また女性。先生。これはどうこうことでしょうか？』

『恐らく、性衝動に感化された殺人だと私は思いますね。えつとですね。今回の被害者はバイト帰り』

（バイト？）

海斗の脳裏に、メイド服の少女のおびえた顔が過ぎつた。心臓が

跳ね上がった。

「違うわ」そんな彼を見た琴無がたしなめるように言った。

「これは昨日の深夜。今日の一時ごろに殺された女性よ」
横顔しか分からぬが、琴無の様子は、つまらなそうに冷淡に見えた。

「本当なのか?」

「ええ。確認してるもの」

「確認? なんで、そんな事知ってるんだよ?」

「私には仲間が居るのよ。教えなかつたつけ?」

いや、教えた。と海斗は言った。確か、名前は足狩と聞いている。

「その仲間が調べたのよ」

そう言つて、沈黙に陥る。しかし、海斗はこの陰鬱な状況を打破する為に、

「あのさ。なんで、俺が悪いんだ?」

琴無はTV画面から、少し驚きの色を持つた顔を彼に向かた。

「それは、君が戦つたから」

「なんで、戦つたのがダメなんだ?」

「危険だからよ。死んだら、魔術師どうこうの話じゃないし」

「つつても、俺が戦わなかつたら、あの子は死んでたぞ?」

熟していな青い肌を噛み切られて、犬の餌に変わつていただろう。

「私が守つたわ」

「守つた? 後から出てきたのに? 大体、あの時、何処に行つてたんだよ?」

「加川と戦つてた」

琴無の言葉には濁りや迷いがない。胡乱な様子もなく、嘘ではない事はすぐに分かつた。しかし、海斗は一応、「嘘じやないよな?」と尋ねた。

「ええ。人払いを張つたもの私だから」

「人払いってなんだ?」

「人を無条件で寄せ付けないための魔術。君と最初に会った時も、張つてたはず」

思い返してみると、琴無と始めて会った日、自分以外誰も居なかつた気がする。いや、誰もいなかつた。印象深くあの日は覚えている。

「じゃあ、人が居なくなつたのは今無のせいなのか？」

「ええ。一般人を戦闘に巻き込みたくないもの。大体、魔術師として人払いをするのが暗黙の了解なの。だから、君があの時、出会つてしまつたことは不測の事態だったの。だつて、君はどう見ても一般人だし、特別な力を持つているとは思えなかつたから。また、一般人が私のミスで」

「またミス？ 何？」

「いや、なんでもない。とにかく、君は一般人なのだから。戦うことより、逃げることを考えて欲しいのよ」

何かを取り繕つた琴無。顔には一瞬焦りがあつた。

「なんでもない訳ないだろ？」

「なんでもないの。君には関係ない。魔術的な話だから」「そうやって、魔術的な話、魔術的な話つて。俺を除け者にすんなよ」

無意識に海斗の両手は強く握られていた。一方、琴無は責め立てられているかのように、俯いて、唇を動かす。

「実際、除け者でしょ？ 一般人と魔術師。本当は関わっちゃいけないの」

また、これだ。海斗は思つた。まるで、人間と猿は違う。大きく見れば同じだが、細かく見れば違うと言つているかのように、共存を否定している。

海斗は言葉を放とうとしたところで、琴無は彼を阻むように、顔を上げた。白い肌に黒い髪が掛かる。

「だけど、君は関わってくる。怖くないの？ 意味もなく戦つたせいで、死ぬかもしれないんだよ？」

「…………」海斗は固まつた。

「だから、私は戦つて欲しくないのよ。死ねば、そこで終わつて、死んだ事実だけが残つて、犯人の正体を知らないまま、周りが悲しむだけよ。それって悲しい事じやない？ 絶対に捕まらない犯人を捜す警察も、誰か分からぬ相手を怨む周囲も。あと、殺される理由がない君自身も」

（くつそ。なんて、言い返せばいいんだよ）

目の前の魔術師は、自分のことを思つて戦わないで欲しいと言つているのだ。決して、足手まといにならないでほしいから、という自分自身の為ではない。自分 山紙海斗の為に忠告しているのだ。もし、彼女自身の為に彼女が言つているのなら、言い返しそうが幾らでもある。

引き止めた自分が馬鹿らしくなつた。結局、引き止めて危険を抱え込んだのは自分ではないか。

額に手をやり、食卓に肘を突く。

「私は、出て行かないわ」

海斗はその言葉に顔を上げた。

そこには、ただ強く、彼を見据える魔術師がいる。

「もしかしたら、君が狙われてるかもしれない。君の特異な左腕が加川の目的で、それに付随した理由で殺し周つてるのかもしれないの。だから、私は君を守るわ。だって、一般人でしょ？」

真剣な様子で言つた琴無を見て、何故だが海斗は笑つてしまつた。言つている事が無茶苦茶ではないか。まるで、そう一種のツンデレだ。

すると、琴無は海斗に向かつて顔を上げた。

「あ～。なんつーか。その、恥ずかしいな。真顔で、しかも、女の子に守るとか言われると」

助けるなんておこがましい考えだつたのかもしれない。海斗はそう思つた。

琴無は期待を裏切られたかのような顔をした。同時に小さな嘆息も吐いた。だが、すぐに彼女は少し照れたように笑った。

「また、女の子って」

「いや、女だろ？ 性別上女だろ？ やっぱり、股の間に何かがあるのか？」

「股の間？ なぞなぞ？」

ミスつた。失言だ。海斗は「忘れてくれ。とにかく、正解はホースだが。とにかく、忘れる」

「ホース？ ホースって、馬？ 水が出るホース？」

「それ以上の追求はやめなさい。自分の品質が下がりますよ。あと、俺の好感度がダダ下がりですよ。とにかく、俺が下ネタしか言えない、そんな男になる……！」

「下……ネタ？」

琴無は斜め上を向いて、数秒。頬が染まって、ピクッと動いた。そして、ゆっくりと焦点を海斗に合わせた。

「もしかして、」

「だから、言つたんだよ…… 結局、思い浮かべるってさ。ほら、考えるのやめましょ！！」

両手を琴無の前に持つてきて、スッタップのポーズ。

「そう言わると、更に」

「下ネタ、ダメ絶対！！」

「 ただいま～」

間延びした声が玄関口から聞こえてきた。

海斗は腕を上げたまま、壁に掛かる時計を見る。時計は9時を回っていた。

足音がリビングまで近付き、ドアノブが回される。

「いや～田中君がね。絵美さんの息子さんについて」

調子よく入ってきた絵美。両手に『鮨』の文字がプリントされた

ビール袋がある。形影も円状で半透明の表面は黒く染まっている。

「あれ、海斗。洗脳と感度アップの超能力、使えたっけ？」

コクンッと首を絵美は首を傾げた。

両手を下げる海斗は、

「母さん。俺を性欲魔人として仕立てあげるのをやめてくれないか」「えっと、」

琴無の言葉に、海斗は彼女を見た。

「でも、君が足手まといつてことは、覚えていて」

海斗の口は黙り込んだ。

問答。初恋について

膝にはピンクのマフラーが乗っていた。

隣の琴無は、他人の目を気にせずに、魚介のクリームパスタをフォークで巻き上げ、黙々と食べていた。リング状になつたイカや、クリームソースがよくからんだエビを刺して、それらも口に入れた。パスタの香りだけで、腹の虫が騒ぎ出しそうだ。

すると、琴無は音を鳴らさないようになると、ゆっくりとフォークを皿に置いて、ドリンクバーで注いで来たコンソメスープに口をつけた。これまた、コンソメのいい香りが鼻腔を突く。

しかし、海斗はそんな匂いを堪能する事なく、チュウチュウと口一ラに挿したストローを啜つていた。

ビクビクしながら、チラッと海斗は前を見る。

そこには、テーブルを一定のリズムで叩く、狭山奈津実の姿があつた。背もたれに寄りかかつて、足も組んでいた。整つた顔の眉間に皺が出来ている。

「山紙君？」

「な、なんでしょう、狭山さん」

事の始まりは、一時間前だった。

二人は、その日、騒がしい女子生徒たちの列に並んでいた。前から数えて三番目で、もう少しでクレープ屋のレジまで到達する予定だ。

「なんで、俺まで並ぶんだよ」

「いいじゃない。別に」

「よくない。と海斗は思ったが、それを口にはしなかった。もう、こんなやり取りを何回もやっているからだ。本来なら、噴水の近く

のベンチに腰掛けて、待ちたいのが、この魔女っ子。自分だけ買つのは忍びないという理由で、海斗を無理矢理並ばせていた。

海斗は、隣でウキウキと待ち切れない様子の琴無を見て、

「はあ……」

弱い溜め息を吐いた。

この竜狩市に描かれる巨大な魔術で日本を潰すという摩訶不思議な物語は、どこに行つたのやら。一応、主役であるはずの魔女っ子には緊張感の欠片もない。もう少し、作戦とか相手の分析などした方が良いのではないか。

（なんで、俺が滅入つてんだろ）

再び溜め息を吐き、顔を上げると、前に並ぶ女子生徒一人組が、ちらちらと海斗達 琴無を見ていた。何故か目がキラキラと輝いている。

「ヤバイって、チョー可愛いくって。芸能人かな？ 芸能人かな？ とゆーか、隣は誰？」

「多分、ドレイ」

「ドレイ？ 確かに……ほいかも」

（聞こえてるぞ～、女子高生AとB）

「ねえ、君は何食べるの？」

「あ？」

海斗は横を向くと、琴無が前屈みに、立てられたメニュー表を吟味していた。彼女の身体越しでも、意外と料理数も多いらしくことが分かった。メニューが十数段に渡つて書かれている。

「俺は甘いのがあんまり好きじゃないから、別に食べなくてもいいぞ」

すると、琴無が疑問を顔に貼り付けて、振り返った。

「じゃあ、なんで、並んだの？」

「いや、お前が並ばせたんだろう？」

「ふうん」

「やめる。俺が悪いみたいな雰囲気だすな」

「じゃあ、私は一番高いヤツ、頼もう」

「見せつけか？ 貧乏学生に對しての見せつけか？」

丁度、言い終わったタイミングに。

「アレ？ 山紙君？」

聞き覚えのある声。何事も考えずに、海斗は反射的に振り返った。

「ああ、狭山か」

そこには、ポーテールの少女、狭山奈津実。プラス、海斗のクラスメイトの女子二人。お揃いのスクールバツクを持っていた。

海斗は、奈津実のびっくりした顔で気付いた。

顔を奈津実から左へ。琴無が自分につられたのだろう。奈津実を見ていた。

酸素とか、窒素とか、あと諸々が一気に固体になつて、彼らの行動を抑制したかのように、その場が固まつた。

そして、口火を切つたのは、

「お客様の番だよ

クレープ屋。

そして、現在。

目の前に現れた、冴えないクラスメイトと一緒にクレープ屋に並んでいた美少女を調べる為、学生達の溜まり場と化している、ごく一般的なファミリーレストランに、琴無と海斗の一人は連れられた。男一人に女四人という、男子学生に見られたら殺されかけない組み合わせで海斗達は座っていた。とはいっても、三人（海斗、琴無、奈津実）と一人に別れてはいる。

しかし、海斗達の班は、好奇心旺盛な学生達の注目的であり、ありもしない推測などが聞こえていた。例えば、浮気現場を目撃されて、現在進行形の修羅場や、一夫多妻制を推し進めるクソ野郎と美少女二人。

「山紙君？」

ビクッと小動物みたいに海斗は跳ねた。

「な、なんでしようか、狭山さん」

「説明をして欲しいの」

「な、何の？」

自分は悪くないのに……と思いながらも、海斗は奈津実を直視できない。伏し目になつて、テーブルを見ていた。

「決まつてるじゃん」

奈津実の声が一段と険しくなつた気がした。

「その、えつと。そうですね」

「ほら、早く」

海斗は決死の覚悟（彼に言わせれば）で顔を上げた。握られた拳には汗で蒸れていた。

「俺の彼

」「

「そういう話じゃなくて」

「え？」

「だつて、同級生なのに知らないからさ、誰かと思つて。そんなに可愛いなら、すぐに分かつていいものなのに」

「えつと、怒つていたのでは？ 僕に彼女ができるて」

一層、眉間に皺を寄せて、奈津実は「何を言つてこりゃんだ。コイツ」という顔をした。

「なんで、私が山紙君の恋愛事情に関係しなくちゃいけないの？」
「漫画とかゲームなり、狭山さんは確実に攻略ヒロインな気がするんですけど……しかも、好きな気持ちを全面に出せない女友達のキャラで」

「もしかして、山紙君って現実と漫画を区別できない人？」

「違います！！ いや、でも、なんつーか」

マイペースにパスタを食べている琴無を横目に見て、

「信じられないくらいの漫画的展開はありました」

「も、もしや、………… 絶滅危惧種の『イイナズケ』！？」

奈津実が身を乗り出した。

確かに、『イイナズケ』だったら、かなり嬉しかった。仮に許嫁だったら、「日本の危機かよ」という不安な気持ちにはならなかつただろう。

「そつちのが、もつとマシかも」

「それ以上……妊婦ね。パパになるんだね、山紙君。大丈夫だよ。私の知り合にはママになつた子、居るから」

「違うつて！」

「じゃあ、何？」

「え？　いや、えつと」

海斗は下唇を舐めた。乾いた感覚がしたのだ。

奈津実と田を合さないよう、お会計を済ました子連れの親子に視線を向ける。

（どうするんだ。許嫁以上の不思議展開つてなくね？　魔術は別として）

どうにも、埒が明かない。

海斗は琴無を軽く肘打ちして、琴無に顔を近づけた。

「子供の名前はやつぱり、ら行とか、を行とかの方がいいのかな？」

という奈津実の言葉は無視だ。

「ど、どうすんだよ」

「幼馴染」琴無は動搖を見せずに即答。

（幼馴染……だと）

それなら、昔、別れた幼馴染が戻ってきたということで、納得がいく。少し、インパクトが弱い気がするが、仕方あるまい。

「えつと、幼馴染」

「うそ…………幼馴染が山紙君の許嫁で妊婦」

「違う！！　なんで、全てを足した！！　つーか、どこかのエロマンガにありそうな設定だな、それ！！」

「だって、すんごい展開だつたんでしょ？」

「まあ、でも…………何年ぶりだつて、今無？」

「八年」

「そうだ。八年ぶりだ。八年ぶりに、奇跡の再会したんだから、それはアレだろ？」

「ふうん。でも、山紙君は幼馴染のことなどを名字で呼ぶんだね。本当は仲良くなかったんでしょう？」

「え？　ああ、いや、八年ぶりだから互いに恥ずかしさがあつてな。でも、あの頃は仲良かつたぞ。なあ、今無？」

琴無は何事もなく、頷いた。丁度、食い終わつたらしく、パスタがなくなつた皿にフォークを置いて、

「うん。私達、仲良かつたよね。ホント、一緒に富士山登つたときなんて」

(ふ、富士山……余計な事を)

「あ、ああ。そうだよな」

「え、富士山？　私、行つた事ないよ～」

無論、富士山を登つたことがない一度たりともない海斗は、奈津実が富士山の話題に食いつかないよう、「

「富士山って、どんな

「……………」

「そういえば、名前を教えてやれよ。二人とも」

「え～何それ～。話のふり方が雑だけどお～」

「気にしたら、負けだ。とにかく、あいをつぐらじしどけ」

「う～ん。じゃあ、しゃあない。名前ね。名前は、狭山奈津実。狭

山は狭い山つて書いて、奈津実は」

テーブルに指を滑らせて、奈津実は自分の名前を示しした。

「奈津実つて、そう書くんだな」

「何、それ。席隣じやん」

「画数多くて、びっくりしただけだ。俺の名前は少ないからな」「画数の問題じゃないよ。あ～あ。クラスとしての絆がここで」

「大丈夫だ。クラスの絆は名前じゃない。多分、何かだ」

客の高校生がペチャクチャと喋りながら、この店を出て行つたと同時に、琴無が口を開いた。

「名前は今無琴無と申します。琴無は、音楽の琴が無くなるつて書いて、琴無です」

「あ、私には敬語じやなくていいよ。多分、同じ年なんだし。あと、よろしくね、琴無ちゃん」

琴無はコクンと頭を下げる。

そんな琴無を眺めつつ、海斗は、

「俺の時もそれ言つたな。皆に言つてるのか？」

「いや、山紙君には言つてないよ。山紙君、最初から敬語じやないし」

「せうだっけ？ 覚えてないけどなあ」

「記憶力が乏しいね」

「普通、最初に会つた時の事なんて覚えてねえーだろ」

「でも、幼馴染のことはちゃんと覚えているんだね」

「そりゃあ、幼馴染だからな」

「こんな、魔術使える幼馴染が居たとしたら、忘れる訳もない。確かに私達とは違う雰囲気があるよね。なんか、同性として悔しいよ」

奈津実は琴無を一瞥して、せつ言つた。そこには皮肉はなく、爽やかさを感じられた。

「そうそう。最初、一人を見たとき、山紙君……もしや、齧したの。つて、思つたもん。もしかして、今も」

「んな訳ねえーだろ。そこまで、中身は腐つてしません」

「でも、やけに仲がいいよね。一緒にクレープ屋に並んでるなんて。私の幼馴染なんて、もう会つてないし、会いたいとも思わないもん。もしかして、何かあったの？ 小さいときに結婚する約束をしたとか

「あ~~~~~」「

チラツと琴無を見ると、首を横に振つていた。そんなに嫌なのか。

「ないかも」

「じゃあ、初恋で両想いだつたけど、お互に伝えられなかつた？」

「あ~~~~~」

チラシと琴無を見ると、首を横に振っていた。そんなに嫌なのか。
まるでデジャビュである。

「俺も今無もないかも。つか、今無の初恋なんてあるのか疑わしいけどな」

「あるよ。女の子にはある……だよね!?」

奈津実の訴えるような口調に、琴無はビクッとする。
しかし、答えたのは海斗。

「今無にある訳ないだろ」「今無にある訳ないだろ」

「ある……」「ある……」

初恋があるといつのは女の子の絶対条件なのか。

「いや、ないって」

「なんか、嫉妬って醜いね。BUTだよ」

「嫉妬、じゃないって……」

「じゃあ、なんで初恋が無いなんて決め付けるの?」

「それは、」

魔術師なんて口が裂けても言えなかつた。というか、魔術師だから初恋が無いというのは理由といつか憶測だ。

だから、

「勘だ、第六感」

「ふーん。じゃあ、後で聞こいつ。では、次の質問です」「奈津実は一呼吸を置いて、

「なんで、そんな仲いいの? だつて、好き同士でもなんでもなかつたんでしょう? 私の幼馴染は初恋の人だつたけど、二人みたいに仲良くないよ。多分、今、会つても顔分からないし」「え、あ、びっくりだな。恋なんて精神病とか言って、切り捨てそうだけど」

「そんな風に思つてたら、こんな話しないじゃん」

「それもそうか。結局、どうなつたんだ、幼馴染と?」

「小五で転校して以来、からつきし。おふざけでも、結婚の約束も

したのにね」

「だから、誰とも付き合わないのか」

「そう言つ訳じやないよ。青春はしてるもん。買ひ食いつて、一種の青春だもん」

「甘酸っぱい恋愛とかしないのか？　お前なら、選り好みでないと思つんだけどや」

一年の十一月までに、告白未遂まで数えて12回。丁度、月一の周期で告白をされているのだ。

しかも、海斗は、「どう断れば、相手が傷つかないのかな」と相談されているのである。

「う～ん。だつて、高校生つて、身体田當てでしょ？」

「おいおい。日本の全高校生を敵に回したぞ。一応、皆さんは恋愛を楽しんでる訳でな。つつか、なんで告白されたことがない俺が、お前に恋愛の真理を説いてんだよ」

「でも、夏のプールで、教室から見える男子達の田がぎりついてた気がするんだけどあ」

「それは男代表として、当然だと宣言する。だつて、スク水だぞ？」

「どういう事？」と、奈津実は首を傾げた

「いや、アレだ。学生の内しか、見られない代物だろ、スク水つて？　ビーチでスクール水着は着れないだろ？」

「なんか、マニアックだね。もしかして、体操着がブルマじゃなくて、がっかりしてない？」

「…………」

奈津実と琴無のブルマ姿が目に浮かんだ。身体の形がハッキリと映し出される奈津実の悩ましい体躯と、ダボダボの上着の琴無。赤いブルマから伸びる、奈津実の健康的に焼けた肌と、琴無の白雪のような純白の肌。

ソリューションだ。と海斗は思った。アイドル旋風に乗つかつて、学園系アイドルグループを作ろつではないか。そうだ。次の文化祭で提案をしてみよう。

精神を磨耗させても構わない。

「えっと、山紙君？」

声が掛かった。それは奈津実の声ではなく、

「ああ、前崎。山井」

奈津実の連れである内、一人の声 前崎の声であった。

通路に立つ二人は、おそろいのスクールバックを持つていてことから、ドリンクバーへ行く訳でもなく、帰るのだろう。

海斗は彼女達から、奈津実に視線を戻すと、白い目で海斗を見ていた。

「山紙君って、顔に出るね。少し、気持ち悪かったよ」

「なあ……」「ご、誤解だ！！ 決して、いかがわしい事はない！」

！ アイドルについて、思案していただけだ！！」

「な、奈津実。私達、帰るね。あと、バイト頑張つて

「あ、うん。稼ぐよ。今日もサンタのコスプレできるからね」

それを聞いた前崎は柔和そうな笑顔を浮かべて、

「じゃあね。山紙君」

ぎこちなく手を振った

そして、二人は行ってしまった。会計を済まして、このファミレスから出て行くのも見えた。道路側の夢無は、ガラス張りの壁越しに礼儀正しく頭を下げていた。

「あ、いや、前崎……」

弱く手を伸ばした海斗。誤解されたまま行ってしまった。

白けた雰囲気がこのファミレスを覆つ。そもそも、もう、この店には殆ど人が居なかつた。昼飯時を過ぎたからだろう。いや、このテーブルで騒ぎすぎたせいか。

「じゃあ、私も帰ろうかな」

何を思ったのか、突然立ち上がつた奈津実。ガタンとテーブルが揺れて、炭酸が抜けたコーラが揺らいだ。

「バイトもあるしね

奈津実はあの二人とおそろいのスクールバッグを肩にかけた。

「そうか。じゃあ、俺達も」

海斗は立ち上がるうとして、腰掛けっていたイスに手を置いた。しかし、一方の琴無は動こうとしない。

「おい、今無、行くぞ」

「えつと、奈津実さん」

海斗の言葉など、耳に入らなかつたといつた様子で、琴無は奈津実を見上げた。

「え、あ。な、何、琴無ちゃん？」

「なんで、帰るんですか？」

（それはバイトだろ）

先ほども言つていたではないか。アルバイト頑張つてね、と。すると、奈津実は「うへん」と唸つた。

「用事はないけど、多分、『何となく』かな」

その答えにキョトンとする海斗。あまりに自分の予想と、かけ離れている。

「そうですか。ありがとうございます」

「ああ。いいよ。というか、敬語は……って、仕方ないか」

そして、「じゃあ、また、明日ね。あと、初恋はあるよね、琴無ちゃん？」と言つて奈津実はこのテーブルから離れていく。

「おい、俺つて嫌われてるのか？」

「私が念図したら、そっちの席に移つて」

「移る？」

「ええ

琴無は立ち上がりながら、セーラー服の胸ポケットから折り畳まれた一枚の札を取り出す。海斗も、つられる様に立ち上がった。

「あと、これ。仲間の居場所が分かるから」「差し出された札を海斗は受け取る。

「い、いきなり、なんだよ」

「来るわ。マナーを逸した魔術師が」

「は？ どこに？」

「ここからでは、奈津実が道路を駆け足で渡りながら、こちらに手を振つているのしか、見えない。他は道路を走る車ぐらいだ。もしや、中では？」

海斗は振り返つてみたものも、自分達以外誰も居ない。

いや、おかしい。

「待て、店員もいなげ」

そうだ。店員が居ない。お客を残したまま、居なくなつてゐる。食い終わった皿はそのまま、テーブルの上にあるままだし、奥の厨房から物音一つしない。

「人払いつてやつか

「ええ。だから、来る。絶対」

海斗は琴無が見つめる先を見た。

(ん？)

一台のトラックは見えた。何も変哲がない中型のトラック。しかし、スピードが尋常ではない。法廷速度に喧嘩を売つているような速度だ。

いや、それ以上に、「あのトラック、人が

「 来る！」

無人トラックの運転席が光つた。同時に、進行を左に変えた。

「お、」

声を出そうとしたところを琴無が彼を抱えるように、右へ飛ぶ。そして、合間を詰めるようにトラックがファミレスに突っ込んだ。車体が自身を犠牲にしながらも、その半身をファミレスに突入させた。そして、バキバキと木片やガラス片を踏み壊し、半分をファミレスに入れたところで止まつた。

焦げ臭さがファミレス内を覆つ。

海斗は通路を挟んで反対側のテーブルの上で、呆然としたまま尻餅をついていた。

「ま、マジかよ」

ギリギリだつた。もし、直角にトラックが入つてきたり、確実に死んでいた。先ほどまで使つていたテーブルの天板がファミレスの奥の方まで、飛んでいる。地面には、奇跡的に自分達には当たらなかつた碎けたガラス片。そして、グチャグチャになつたピンクのマフラー。

背中から腰に掛けて、嫌な汗が噴き出したのを海斗は感じた。テーブルの上に立つ琴無は、上から飛び降りた。ローファーがガラスを踏み潰す。

「逃げて」

「は？」

「その札を見て、逃げて」

「逃げるつて……お前はどうするんだよ……戦うのか！？ 体調も万全じゃねえーし、また、この間みたいにやられそうになつたらどうすんだよ！？ だったら、俺も一緒に」

「とにかく、逃げて！！ 君を守る余裕はないの……」

琴無の身体が少し揺れた。

海斗はその言葉に何も言えなくなる。

結局、助ける事がおこがましいと思つていても、一緒に戦うという事は結果的には助けるという事なのだ。

（ホント、何のために、俺と戦るんだよ……。くつそ、本当に足手まといじやねーか）

唇を噛んだ。

「早く……」

海斗は手渡された札を握り締めて、立ち上がつた。

「無理すんなよ。今無

「分かつてる」

そして、走り出した。

既知の黒

「くつそッー！」

トラックが突っ込んだファミレスから逃げ出し、海斗は走っていた。心中はやりきれない気持ちで溢れていた。

（一緒に戦つてやりたい。けど、俺じゃ足手まといだ）

昨日の黒い犬の件で思い知られた。助ける以前に、「戦いたい」などおこがましいのだ。

人も車も居ない通りを走り抜ける。

これは恐らく、人払い。

琴無が言う、「一般人を巻き込んではいけない」というルールに則つて使われているのだろう。

「ん？」

海斗の前方、100メートルほど。そこに、あの狭山奈津実がいた。何かじれったそうに右往左往していた。まるで、待ち合わせに遅れている彼氏を待っているようだ。

すると、奈津実はこちらに気付き、

「山紙君……」

と、あからさまな安心を表し、駆け寄つてくる。

海斗も立ち止まつた。少し聞きたいことがあったのだ。

「狭山。なんで、ここに？」

「え？ えっと、凄い音がしたから。その、怖くなつて。それと…」

…

(無条件じゃないのかよ……人払いって)

琴無が言うには、無条件に人を払うはずだ。それとも、人払いの魔術の範囲にたまたま奈津実が入らなかつたのか。

黙り込んだ海斗を見つめていた奈津実は、突然にハツとした顔をして、こげ茶色の瞳を見開いた。

「そういうえば、琴無ちゃんは！？」

「あ？ ああ、アイツなら逆方向に逃げた」

「逃げたつて……何があつたの！？」

「あ～」

トラックが突っ込んだと言つてしまえば、恐らく、奈津実は興味本位か何かであのファミレスに戻るだろう。

「えつと、後で話すから、その、今無を迎えて行くから」「私も！…」

しかし、奈津実が海斗の右腕を強く掴んだ。心なしか、彼女の瞳に奇妙な光が浮かんでいた。

奈津美はただの一般人だった。

海斗は下唇を噛んで、顔を上げた。

「狭山。大丈夫だ。といふか、気にすんな。まずは自分のことをどうにかしろ」

「やつぱり、何かあつたんでしょう？ だって、警察とか、そんなこと言わないんだもん」

海斗は奈津実の手を自分の手で包んだ。

「一般人にはダメなんだよ」

「何を言つて……」

力が弱まつたタイミングに、逃げるように走り出す。後ろから、聞こえる声も耳に入れずに。再び海斗が振り向いた時には、奈津実は見えなくなつた。自分の言葉通りに逃げたのだろう。いや、人払いの魔術の効果が及んだのだ。

「あつぶねえ」

ドカッと疲れがのしかかつた。そんな気がした海斗は、自販機横の赤いベンチに腰を掛けた。

一通りの仕事を終えた気になり、彼の心に幾ばくかの安心が現れ、不安の小波が静まつた。

ふと右を向けば、大通りが見え、次元が変わつたかのような、こちら側とは逸したあの賑やかさが溢れ返つていた。

「そついや、」

海斗はポケットに手を突つ込み、あの札を取り出した。見た目は折り畳まれている普通の和紙。親戚の家の神棚に、粗雑に供えてあつたものとそう変わらない。

海斗は折り畳まれている札を広げると、白紙で何も書いていなかつた。

「なんだコレ」

海斗は持ち上げて日の光に透かしてみる。

すると、色鉛筆で塗られたような粗い青い点が紙中央に。それが前触れもなく浮かび上がった。

そして、もう一点が斜め右上に現れる。

海斗はそれを見上げながら、立ち上がった。
もし、これで仲間の居場所は分かるなら、

(多分、カーナビみたいなもんか)

中央の点が自分で、青い点が目的地だろう。
あくまで仮定だが、説明を受けていないのだから、自分の憶測に従うしかあるまい。

「行くか」

海斗は一度、通つて来た道を振り返った後、歩き出した。

憶測は当たっていたようだ。

海斗は動けば、段々と斜め上の青い点が移動する。
今は、二つの点は重なり合つていた。

「この近くだよな」

ポケットに札を戻し、歩道を歩きながらだが海斗は魔術師らしい人物を探す為、周りを見回す。

とは言つても、誰もが冬の装いだ。そもそも、魔術師らしい服装というものが分からぬ。

「くつそ」

海斗がふと右側に顔を向けると、元気よく手を振っている男が見えた。

見た目は、無地の白いシャツにインナーは灰色。そして、至って普通のジーンズという、季節感ゼロだが、爽やかな大学生風だった。それに反して、何をどうしたのか自分を主張している。もしや、こちら側の歩道に知り合いがいるのかもしれない。

まあ、兎にも角にも、人目を気にしない大学生風など関係ないことだ。

海斗は顔を戻し、再び人探しを始める。

「やつぱり、いねえーな」

そして、また右を向くと、男は居なかつた。
(知り合いで出会つたのか、俺と違つて)

トン、と突然、肩に手を置かれた。
反射のように海斗は振り返つた。

「君だろ？ 左手君は」

ファミレスは暗かつた。

蛍光灯は無惨に、壊く、全て割れてしまつたのだ。ファミレスから見えるのは、ただ曇り空の隙間からぼやけた夕焼けがあつて、あ

の日、見た目を突き刺すようなオレンジ色の光芒は見られなかつた。

琴無が首を回すと、ボキボキと軽快な音が鳴つた。

「早くしなつて、今無琴無」

「もう少し、丁寧に入払いを使つたら？」

運転席を潰したトラックの影から現れる。

「悪いわね。私は雑なの」

その姿はサンタ。グラビアモデルのような起伏のあるスタイルに、化粧を塗りたくつたような顔。瞳は印象的なパンダ目。

あの少年を誘惑していた女だつた。サンタの赤い唇が三日月に歪み、彼女の黒いロングブーツが、ゴリゴリと飛び散つたガラス片を踏み潰す。

「でも、一気に壊すのも楽しいのよ。ほら、他人の作ったトランプタワーって壊したくならない？」

「そう」「う」琴無は、それを鼻で笑つた。

「そうよ。もう、鳥狩りとか犬狩りは疲れたのよ。バイト代とかどうでもいいから、早くやらない？」

「加川の命令じゃないつてこと？」

「ええ。加川さんは今無琴無とは戦わせてくれないのよ」

「部下思いね」

「あ？ 違う、違う。あなたを殺したいから、殺させてくれないのよ」

「『魔命』を潰した日本の『魔術団』旅団長補佐の今無琴無を殺したからよ」

雲はひしめき合ひ、空から注ぐ橙の光は減っていた。その代わりといわんばかりに身の芯を痺れさせるような寒さも漂い始めた。

「魔術団？」

首を傾げたのは海斗だった。

「うん。魔術師にも派閥があつてね、僕達が所属するのは魔術団。簡単に言えば、魔術師の警察みたなものだよ」

答えたのは、爽やかな大学生風の男だ。背は少し海斗より低いが、その立ち振る舞いから年上だと、何となくだが感じ取れる。

「じゃあ、今無はその副長ってことですか？」

「そういふこと。それで、僕は琴無さんの部下つてこと」
一人が早足で歩いているのは、肩が擦れ合つほどに人通りの多い歩道、そして彼らが向かっているのは、この竜狩市随一の大きさを誇るデパートだ。見上げれば、この道の奥でそびえ立つていた。

「そういうえば、僕の名前を言つた？」

「ああ、聞いてないです」

「僕の名前は足狩。恐らく、琴無さんから聞いてると想つけど」

海斗は素早く頷いた。琴無の話の節々に現れた名前だ。

大学生風の男　　足狩も「よし」と確認したように頷き、

「じゃあ、話を戻すけど、僕達は上からの命令で、加川を処罰する為に来たんだ。だから、いつも戦つてゐる。でも、今回は圧倒的に不利なんだよ」

「今無の体調ですか？」

「それもあるけど、」

足狩は交差点の信号を無視して、突つ切つた。海斗も自転車に轡かれそうになりながらも、何とか彼について行く。

「この場所には、珍しいことに一切『龍脈』がない」

「龍脈？」

何処かで聞いたことある単語だが、いかんせん意味が思い出せない。

そんな海斗の表情を察したのか、足狩が口火を切つた。

「龍脈とは、この世界の魔力。魔力が人間の身体に流れているのと同様に、この世界にも魔力があるんだよ。しかも、魔術師ぼくたちはその魔力を借りられる。例えば、パワースポットと呼ばれる場所には、龍脈が集まっていることが多いんだ。多いって言つても、殆どの地域に、ピンからキリまであるけど龍脈は通つてるんだ」

「じゃあ、ないってことは流れてないってことですか？」

「うん」

「でも、それと今無がどう関係するんですか？」

「山紙君は魔術の話、魔術的な能力の話は聞いた？」

「あ、ああ、俺みたいに能力があると、身体の一部が変化するって

海斗は自分の茶髪を指差して、言つた。そして、付け加えるように、「あと、今無の目も」

「そうか。やつぱり、琴無さんは言つてないのか」

「何ですか？」

「琴無さんは能力者じゃない」

「え？ でも、目が金色じゃ」

「龍に愛された、神に選ばれた無能力者とか、龍の姫つて聞かなかつた？」

龍の姫は聞いた覚えがあつた。確か、琴無と出会つた時にあの加川が言つていた言葉だ。

「聞いたことあるみたいだね。まあ、一いつの内どつちでもいいけど、どちらも龍脈の『龍』という文字が使われているんだ」

「じゃあ、今無の能力は龍脈の魔力を上手く使えるつてことですか？」

「違う、琴無さんの能力、いや、体质だね。どつちでもいいけど、琴無さんの能力は『異常に魔力が濃いことだよ』。龍脈よりも『濃い？』

「あまりに濃い為、世界が能力者だと勘違いしたんだよ。だから、瞳が金色。そして、龍脈の濃い魔力を、更に濃い魔力を持つている琴無さんの身体なら、不自由なく使えるんだ。僕じゃ、龍脈の魔力を使うのは結構きついからね」

「じゃあ、本調子のどのくらいなんですか？」

「50%だね。龍脈と体調が悪い事を考慮したら」

足狩の言葉を聞いた海斗は下を向き、黙つた。

(50%って、半分じゃねーか。くつそ)

しかも　　海斗は拳を握つた。やはり、自分の身勝手さや甲斐なさに力を込めた。それは、彼自身意識したことはないが昔からの癖であった。

一方の足狩は、気楽そうにハハツと笑つた。

その笑いに海斗は不思議そうにして、顔を上げた。

「だから、この話を言わなかつたんだ。琴無さんは

「どうしたことですか？」

「君はアイツに似ている」

段々と歩調を弱め、立ち止まつた足狩は人の出入りが激しいデパートを見上げた。海斗も同じ様に見上げた。デパートは風雨に汚れていた。

「琴無さんの初恋だつたアイツにね」

今無琴無に初恋はあつた。

今から、三年前。

丁度、彼女が中学一年生の時。

その頃には、すでに琴無の実力は群を抜いており、一人で行動する事も珍しくなかつた。

その初恋の相手に出会う事件は、やはり今回のように魔術師が関わっていた。しかし、今回ほど大規模な、目立つようなことはなかつたらしい。しかし、その事件解決には一般人の協力が必要不可欠であつた為、琴無は今の自分と同じ年、16歳の少年に協力を仰いだのだ。

最初は嫌がつていた少年だが、時間が経つにつれ、お互いは惹かれ合うようになつていた。

事件への協力、また、戦いへの協力も少年は進んで行つようになつた。

無論、琴無は止めなかつた。

だから、戦いには手を抜いて、わざとこの事件の終末を先延ばしのしていた。

だが、その結果

海斗達がいるのは、埃っぽさが否めないデパートの倉庫。棚に並んだ狭い通路をコソコソと歩いていた。見つからないようになると言わ

れたせいか、海斗の心臓がバクバクと鼓動を早くしていた。ホラーゲームをやっているような感覚だ。

しかし、それ以上に海斗は沈んでいた。琴無が自分の境遇に似ている気がしたのだ。

「ほら、山紙君。これ持つて

「えッ」

ぱおとしていた海斗に、ダンボールの隙間に手を入れていた足狩が差し出した物は、見覚えのあるあの刀だった。刀身には赤い布が巻かれており、一般的なものよりも長い。恐らくは1・3mは下らない。布の合間から見えた刃に茶髪の冴えない顔をした自分自身が映っていた。

「この刀って

「うん、琴無さんなのだ。ここに隠しておいたからね」

これ、持つていてくれる? と押し付けられた海斗は、無意識の内に貰い受けた。

一方の足狩は、もう一度、ダンボールとダンボールの間に腕を突っ込んだ。

視線を下げて、左手で握る刀を見る。

想像していたよりずっと重かった。もし、この魔術の恩恵を受けれる左手ではなく、右手で握ついたら、軽い弾みで落としてしまいそうだ。

それを眺め、海斗はふと疑問に思つことがあった。

「そういえば、なんで今無にこの刀をすぐに渡さなかつたんですか?

?」

「ん?」

足狩は顔だけをこちらに向けた。

「だつて、この刀つて、今無の武器ですよね？」

「それ渡したら、琴無さんは張り切るでしょ？　ああ、取れた」

隙間から抜き出した腕には、輪ゴムで纏められた札の束が握られていた。そして、それをズボンの右ポケットに押し込んだ。足狩は空いている手で、埃にまみれたシャツを叩きながら、

「張り切られて負けたら、極端な話、日本は滅びるからね
「ん？」

「琴無さんは日本の魔術師の中でも、強さは最上位なんだよ。最強まではいかなくとも、とにかく強いんだ。でも、もしその琴無さんが負けたら、どうなると思う？」

「加川を止める奴がいなくなるって事ですか？」

まあ、それもあるけど、と足狩は言い、

「他の勢力が日本に攻め入るんだよ。琴無さんは魔術団の一角を成す強者で、もしその一角が欠けたら、狙い時じゃないかな？」

「じゃあ、この戦いはどちらにしても勝たないといけないって事ですか？」

「どうひでしても？　どういう事？」

足狩が首を傾げた。琴無から、日本を滅ぼすかもしない魔術陣について聞いていないのか。

「えっと、今無が、加川が一般人を殺し回っているのは日本を潰す

魔術だつて」

「……そうか。そういう考え方もあるのか」「他に考え方があるんですか？」

「ヘカトンケイル。僕が言いたいのは、直接日本を攻撃するわけではなく訳ではない、自分の力をつけるものだよ」

「ヘカトンケイル？」と海斗はインコのように繰り返した。

「百本の腕を持つ巨人の事だよ。ギリシャ神話で地獄の門番を神々にやらされている」

「加川のあの黒い腕はその巨人の腕という事ですか？」

「そうだ。しかも、ヘカトンケイル百腕巨人の魔術は最高、僕達からしたら最悪なものだ。巨人というのはね、神に匹敵する力を持つんだ。では、もし、その巨人の腕を百本集めたら、それは神を超えると思わないかい？」

海斗はしかめた。少し引っ掛けたのだ。

「でも、その百本の腕は百腕巨人の腕ですよね？　でも、神話じゃ、神に服従してるって」

「魔術は不足した部分を他の魔術で補うんだよ。そして、欠点を無くしたり、アドバンテージを広げる。もし、一本ずつが神に匹敵する巨人の腕だったら？」

海斗は一回、下を向いた。だが、すぐさま顔を上げる。

「も、もし、百腕巨人の力が完成したら」

「誰も太刀打ちできないね。負けるとか勝つとかの問題じゃない。大虐殺だよ。加川は人類史上最強の力を手に入れるよ。でもね、この百腕巨人の力には弱点が。いや、実現が不可能なんだよ。詳しく説明すると面倒だから、こここら辺にしどう」

そう言って、足狩は歩き出した。海斗も無言で彼について行く。

地面に落ちっぱなしのダンボールを踏みつけ、足狩は倉庫の白い扉をゆっくりと開けた。

店員はいなかつたのか、足狩は海斗に視線を送り、倉庫の外に出た。海斗もそれに続いた。

そこは、どんよりとした雲が立ち込める肌寒い屋外だつた。右を向けば搬入口があり、前方には無人のトラックなどが止まっていた。そのうえ、人は居なかつた。

海斗の頭に人払いの文字が浮上する。すると、不安そうな顔をした海斗を見てか、足狩が口を開けた。

「これは人払いじゃないよ。偶然だよ。気にする事はない」

あの気楽な笑みで笑つて、足狩は歩みを進めた。

「気のせいいか…………」

少々の不安があつたが、足狩について行く内にその不安もなくなつた。倉庫から外側を回つて、デパート入り口まで行くと、多数の人を確認できた。殆どが、自分の左手に握られる刀に注目をしていた。安堵の白い溜め息を吐く海斗。

「ほら、行こう」

足狩を追い、透明な自動ドアを抜けると、暖かい空気がふわあと冷えた海斗を覆い、一階広場から三階まで延びる巨大なクリスマスツリーが出迎えた。

この巨木な針葉樹自体はこのデパート開店当時から、こここのオブジェクトとして生やされており、恐らく、今回はデパート側の企画で装飾をしたのだろう。

頂点に金色の星をつけて、梢には林檎やモールやリボン。太い幹には電線が伝つていて、

また、BGMには、フルートなどが使われた楽しげなジングルベルが採用されていた。

足狩はクリスマスツリーには目もくれず、歩みを続ける。クリスマスツリーを両脇から挟むエスカレーターに向かっているのだ。

海斗は彼を追いかがら、

「その、足狩さん。今から、どうするんですか？」

「え？ ああ。人ごみに逃げるんだよ」

「人ごみですか？ でも、人払いの魔術を使つたら、人は居なくなるんじゃないんですか？」

「人払いって言うのは万能じゃないんだよ。例えば、もし核実験をやつている最中の人払いを使つたら、その研究員達は居なくなると思うかい？ 実は居なくならない。それは、その当事者にとつて相当重要なことだからね。だから、僕達は夜に戦う事が多いんだ。そつちのが重要なことをやつしている人が少ないからね。あと、病院の近くでも戦わない。人の量も人払いに反比例するんだ」

「じゃあ、人払いって言うのは人間の心理とか人の量に影響されてことですか？」

「そんな感じかな。で、今デパートに居るのは、敵の人払いが完成するまでの時間稼ぎ。その間に琴無さんが来てくれればいいけどね」
まあ、来るでしょう、危なくなつたら合流するように言つてあるし。まあ、琴無さんが負けるは考え難いけど、と足狩は付け加えるように言つた。

（そうだよな。アイツは負けない）

自分が苦戦した黒い犬は一撃で倒したり、追い払つたりしているのだ。

そのうえ、現役の魔術師のお墨付きもあるのだ。
無駄な心配。海斗はそう思つたかった。

海斗は何気なくクリスマスツリーを見上げたその時だった。

雨が降ってきた。

同時に、火災報知気が赤いランプを回しながら、高らかな唸り声をあげた。BGMは止まった。

一瞬、場が固まる。

ヨーリドンの音を鳴らしたように、悲鳴交じりの徒競走が始まった。我先にと他人を押し退け、一階エントランスに家族連れやカップルが押し寄せた。女声のアナウンスが入るが、様々な恐怖に焼き消される。まるで、それは化物に追われているような、そんな映画のワンシーンを見ているような光景だった。

「クソ！！ 山紙君！！」

足狩は振り返った。その顔には焦りがある。

「上に行くよ！！」

「え、あ」

海斗の返事を待つ事無く、足狩は昇りのエスカレーターを駆け上がった。少し遅れて、海斗もエスカレーターを走る。二階に上がり、すぐに分かつた。火災は飲食店が並ぶ六階で発生していた。煌々と燃えるオレンジ色の炎が顔を覗かせていた。焦げ臭さも舞い降りて、海斗の嗅覚もそれを捉えた。

「なんで」

海斗が動きを止めたエスカレーターを昇り終えると、足狩が見上げて、立ち止まっていた。

それは、昇りのエスカレーターから、デパートにやつてきていた客達が死に物狂いで逃げていたからであった。足狩は歯軋りをする。

「あのバカども。どれだけ、琴無さんを怒らせれば氣が済むんだ」

その台詞から、この火災は加川が起こしたものだと海斗はすぐに理解ができた。

足狩はポケットから、あの札の束を取り出す。

「山紙君。君は戦わなくていい

「え？」

「時間稼ぎをするんだ」

足狩は札の束から一枚を引き抜き、海斗に手渡した。その札には、梵字、象形文字のようなものが紙いっぱいに踊っていた。

「これを持つてってくれ。それは肉体強化の魔術。常人の三倍ほどの力を得られる」

「でも、俺、魔術なんて使えませんよ」

「魔術は『テタラメ』だ。確信がその魔術を土台となり、肉にもなる」

口調がゆつくりとなり、

「君が望めば、魔術は発動できる。まずは信じるんだ、自分を。その腕を」

信じる。

それはとても難しいことだと思つた。

現に、足狩の言葉を信じられずに。今でも琴無のことが心配である。

「僕は上に行く。君はここに居てくれ。そして、加川が来たら死ぬ氣で逃げる」

そう言つて、足狩は押し寄せる人の波を避けながら、階段方向へ消えた。

(どうする、俺)

時間稼ぎなんてやつたことが無い。

具体的に何をすればいいのか。

海斗は頭を振った。どうせ、どんなに考えても答えは導けない。海斗は貰つた札をポケットに突っ込み、ともかくエスカレーターから離れることにした。一般人が戦闘に巻き込まれる可能性を慮つた結果だった。

「…………ふう」

不安と恐怖による心音を留めるように海斗は息を吐き、歩き出す。敵は上階にいると分かつていても、いつどこで襲われるのかという恐怖はあつた。

二階は、様々なテナントに入る婦人服売り場だつた。広々としたスペースに様々な冬服や一先早い春物が並んでおり、一見すれば普段通り。吊り広告もピンク色のものと白のものとが下がつていた。しかし、棚にあつた服は地面に捨てられて足跡がついていたり、マネキンも倒れていた。

よく見れば、変わつていた。

海斗は周りを警戒しつつ、ゆっくりと足を進める。

(人は居ねえーな。逃げ切つたのか)

「ん？」 そう思つた矢先、先の十字路で、

一人、ピンク色のパーカーの少女がいた。二つのおさげを作つて
いる、見た目は5、6歳、小学生に上がりたてといったところだろ
うか。そんな少女が、親を探すように周りを見回していた。

(逃げられなかつたのか。親は今頃、外つて頃だよな。送つたほう
が良さそうだな)

こんなことを見越して、時間稼ぎという配役されたのだろう。
海斗は小走りに、その少女に近付く。一方の少女も近寄りはしな
いが、こちらに気付いたらしく、チラチラと数回、こちらに視線を
投げた。

海斗は歩調を緩め、止まり、その少女の前で腰を少し曲げる。

「えつと、大丈夫か？」

「うん……」

「クン、と少女は頷いた。すると、少女はポロポロと大粒の涙を
こぼし始める。

子供なりに頑張つて涙を我慢していたのだろう。

「お、おい。大丈夫か？」

「うん……」

「うん……」流した涙をすぐに拭いて、海斗を見上げた。

少女の目は赤かつたが、年相応の明るさを取り戻したようだった。
じゃあ、と、少し笑つて見せて、海斗は少女の頭に空いている右
手を乗せた。

「外に出よう」

しかし、少女の返答は海斗との予想とは違っていた。
首を横に振ったのだ。

「なんでだ？」

「だって、ママが」

「ママ？ お母さんなら、」

「ママはトイレに居たの」

「トイレ？」

「うん。トイレ。なんか、お化粧してくるつ

「あッ

少女につられて、海斗は顔を上げた。

トイレから出てきたのは、大きな何かを引きずる人型だった。
視力のせいでぼやけてしまっているが、

それは見覚えのある、嫌な光沢を放つ、邂逅を果たすべきではなかつたあの黒だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8122t/>

ベースノ干渉系

2011年10月8日17時21分発行